

家庭  
保育所  
幼稚園

# 幼児の教育

第八十一卷第十二号  
日本幼稚園協会



12

# フレーベル生誕200年記念出版

## フリードリッヒ・フレーベル

岡田正章編

対談者：莊司雅子・平井信義・森上史朗・野辺繁子・宍戸健夫・海卓子・東喜代雄・白川蓉子・藤井敏彦・利島知可子・西原新一・岩崎次男

A5判・344頁・定価1,800円

幼稚園の創始者フレーベルの理論と実践を現代保育の立場から学ぼう。

フレーベルは子どもの幸せのために世界で初めて幼稚園を作つた人として有名ですが、その実際の姿はさまざまにいわれて誤解を招いています。本書は現在の日本保育界に活躍される先生方に、フレーベルの子ども観、教育観などをさまざまな角度から議論していただき新しいフレーベル像を浮きぼりにしました。

## フレーベルに還れ

長田 新／著 A5判・190頁・定価1,000円

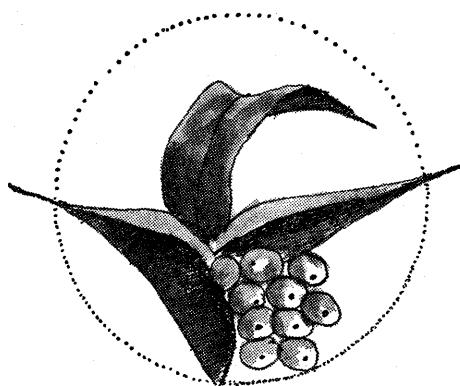
### 全国学校図書館協議会選定図書

フレーベルの教育目標は、知識の詰め込みではなく、技術を与えることでもない。子どもが内にもつっている、何かを作りだそう、表現しようとする、その力を大切にはぐくむことに力点があかれています。商業主義と結びついた英才教育や、小学校教育を先どりした準備教育が幅をきかせている今日の幼児教育界に、警鐘をならしているかのごとくきかれるのではないでしょうか。幼児教育の父フレーベルの教育学のエッセンスがありますところなく解説されています。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

# 幼児の教育



第八十一卷 第十二号

# 幼児の教育 目 次

—第八十一卷 十二月号—

## ☆講演

子供は何を学ぶのか

—「教育と人間」再考—

大塚惠一 (4)

フレーベルに学ぶもの

上野ひろ美 (18)

フレーベル生誕二百年記念祭に参加して 松川由紀子 (23)

イメージへの散歩

菱川敦子 (27)

台所でひろったテーマを

平野美那世 (31)

© 1982

日本幼稚園協会



母の故郷 ⑦（最終回）

——福永津義・人間とその仕事—— 高橋さやか(35)

★「幼児の教育」復刻記念懸賞論文 優秀賞論文

初代編集者東基吉を通してみる『幼児の教育』創刊の時代（下）

国吉栄(44)

雑感——一九八二年の年末に—— 津守真(57)

第八十一巻総目録 (61)

表紙・うすいしゅん 表紙題字・比田井和子 カット・福田理恵

編集委員 外山滋比古・堀合文子

本田和子・永井正子

編集主任 津守真・皆川美恵子



はじめに

# 子供は何を学ぶのか

## —「教育と人間」再考—

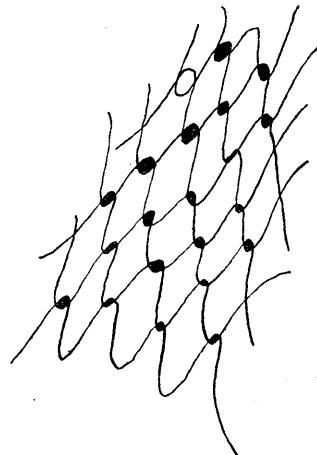
大塚 恵

一

フレーベル生誕二百年という記念すべき年に、伝統のある、ゆかりの学会にこのような形で参加させていただけましたことは、生涯の光栄と深く感銘いたしております。

これから申しあげることは、平素、一般的に考えておりますことを急いでまとめてみたもので、幼児の問題につきまして理論的にも実践的にも造詣の深い皆様方の前でお話しするなど大変おこがましいことと存じております。何かのお役に立てばなどといふより、むしろこの機会に厳しい御叱正と温かい御教示を得ることができれば、身に余る喜びと存じます。

〔本稿は日本保育学会第35回大会（於郡山女子短大）で行なわれた記念講演の原稿記録をもとに執筆されたものです。〕



## 1 問題の提起

西ドイツ・ミュンヘン大学のボルノー教授 (Otto Friedrich Bollnow, 1903- ) 哲学・教育学) は、ハーベル (1782—1852) 没後百年祭に際して出版された著作『ハーベルの教育学』<sup>(1)</sup> の「日本語版への序文」のかで、「子供が四才すでに読み方を学習できる」ということは、実証されてゐる。しかし問題は、子供はこうした能力によって何を有意義に始めるかとであります。单に標識や看板のたぐいを読むこと以上に何があるのかといふことである」と改めて問い合わせ、そしてさらにこれを総括的に「特にその際、問わねばならないのは、読み方学習が子供の発達の全体のなかでどのよだんな機能をもたねばならないか」と述べてゐる。――直してあります。

これらの問いは、早期読み方学習の主張者たちに対する批判と、それを機縁にしてフレーベル教育論の意義の問い合わせを要求してゐるものですが、しかしながらこれられた「全面的人間」の育成を考えました。そして人間形の設問との関連において展開されているものなのです。その設問というのは、「人間ににおいて、当該現象が意味深い、また必然的な項としてとらえられ得るためには、人間の本質はどのように理解されなくてはならないか」というものです。以下、ここに暗示的に示されて、すぐれて今日的な問題点について、できるだけ幼児の教育に関連づけながら考えてみたいと思います。

## 2 教育の理論形成と教育の型

教育理論が本格的に形成されたのは、御承知のようにボヘミアのコメニウス (1592—1670) ならびにフランスのルソー (1712—1778) に始まります。『大教授学』や『世界図鑑』の著作で知られるコメニウスは、教育を「現世の迷宮から救済する道」と考え、教育小説『ハーベル』で有名なルソーは、人間が社会的に疎外される点に着目して、社会的に有用な人間から区別され

成と職業教育、教育と養成を明瞭に区別すべき」とを主張して、教育による社会の更新を強調しました。こうして、教師は始めて「子供の擁護者」としてとらえられることになり、教育を、子供を社会にはめ込み、その一員とするための過程としてとらえた、従来の社会志向型教育論に対して、教育を自己展開と個人の解放としてとらえる子供志向型の教育論が成立することになりました。

しかし、このような新しい傾向も、社会史的に見れば、十八世紀になって急速に拡大された公教育制度によって促進された現実の教育、つまりあきらかに政治的・経済的に設定された目標をともなう教育とのあいだに断絶があり、この断絶から、今日にまで及ぶ教育上の難問題が出現してきます。

### 3 手がかりとしてのデューイ

しかしいでは、この点に立ち入らないで、むしろ当面より重要と思われる問題の所在を見つけ出すために、日本でもよく知られているアメリカの哲学者・教育学者

デューイ (1859—1952) について少し振り返ってみましょ。

デューイの所論、とくに教育についての考え方を代表的に示す最も簡潔でよいものは「なすことによつて学ぶ」(learning by doing) という表現だと思います。しかし、この「なすことによつて」ということを、単に表面的に、デューイは理論より実践を尊んだとか、その思想がプラグマティズム (pragmatism  $\leftrightarrow$  pragma ギリシア語 = 行動するの意) であるからなどと解するだけでは間違っていると言わなければなりません。デューイは一八五九年（安政六年）に生まれ、一九五二年（昭和二十七年）に亡くなっていますが、この期間の含まれる時期というのは、歐米精神史の上では重要な意義をもつてゐるのです。それとの関連で考えますと、デューイが「なすこと」を強調したのは、実は彼が、人間の認識、教育的には学習と言い換えることができるかもしませんが、その人間の認識というものは、その認識とか、何かを学び知ることと自身のなかに根拠をもたないところとに気

づいたからであると言えます。われわれがものを知ると言うときの、その知るはたらきは、それまで自明なものとしてはたらいていた習慣 (habits)、すなわち行動様式や思考様式が阻止されて混乱が生じたときに始めて発動する、と言うのです。デューイは、「習慣というケーキの皮が破れると衝動は解放される。そしてその衝動を利する道を見出すのは知性の仕事である」つまり「習慣が阻止される」とに、思考は衝動の双子の姉妹として誕生する」と言います。より一般的に意識という語を用いれば、意識が意識として生ずるのは、意識の外のものはたらきによって可能になると言っているのです。この場合、デューイが理論的に、伝統的用語の理性 (reason) を区別して知性 (intelligence) という語を用いている点に注意が払われなくてはならないと思します。

#### 4 その他の例

以上、デューイを例として、一つの新しい考え方を検討する手がかりを探ったのですが、実は、このような考

え方はデューイにかぎったことではありませんし、また教育学とか哲学といった領域にかぎられたことでもないのです。この時期、つまり十九世紀末から二十世紀始めにかけては、芸術、文芸など各般にわたって、多くの人がとがそれぞの違いを見せながらも方向を一つにして、一つの時代精神を形づくったのです。フランスのベルクソン (1859—1941) を例にとってみましょう。彼はまず誤った伝統的前提が保持されてきていることを指摘しました。その前提というのは、理論的に獲得された認識の上に始めて実践的行動が基礎づけられるということは、つまり何ができるかを考えためには、まず何であるかを知らないことはならない、ということです。われわれは技術的に形成されている世界のなかで生き、そのなかで目的にかなうように働き、事物を正しく使用するいとを学びます。つまり事物の意味と特性を、事物との実践的交わりにおいて経験するのです。そしてこのこととは、事物を理論的考察において注視するよりはるかに以前のことであると言わなくてはなりません。こうしてべ

ルクソンは「われわれはもともと行動するために考え  
る」と言い、知性とは「道具を作るための道具を作製する能力」であることを明らかにします。彼が「ホモ・サピエンス」（理性人）に代へて「ホモ・スマーベル」（作家人）と言ふゆえんです。

よく知られている別の例としては、精神分析学のクロイト（1856—1939）が「リビドー」（性衝動）を人間活動の根源としたことは良い例ですし、またマルクス（1818—1883）が「意識が存在を規定するのではなく、存在が意識を規定する」と説いたことなどもその例とすることができるでしょう。その他、文化人類学的諸研究において、子供や未開民族において、いかに理性以前の、あるいは理性外の思考形式や呪術的神話的思考形式が重要な役割を果しているかが明らかにわかるよ  
うに思います。

## 5 歴史的回顧

う少し歴史を振り返ってみましょう。

いま述べたような見解に、いわば全く対立する考え方  
は、十七・八世紀頃を頂点とする「合理主義」もしくは

「理性主義」と言われるものです。その代表として、イギリスのロック（1632—1704）とフランスのデカルト（1596—1650）おおざるじんぶやあまか。ロックは生得の観念の存在を否定し、人間の精神はもともと tabula rasa すなわちまだ文字の書かれていない、削り立ての板、つまり白紙であると主張しました。そのようないろへ正しく、つまり合理的に (rational) 書き込んでいくのが人間悟性のはたらきなのです。この考えの影響下にフランスの百科全書派<sup>ブノン・エ・ラ・ダ・ディスク</sup>が始めて百科辞典の編さんを行なったことは象徴的なことです。一方、デカルトの有名な「我思う、ゆえに我在り」というのは、今まで正しいとされたことを全部疑い、そしてこれだけはどうしても疑えない」と、つまり、疑っていること自体と、そのように疑つていい、あるいは考えている自己の存在の確実性に到達したことを表現したものです。デカルト

は、この究極的に確実な点から出発して、今度はいままで疑つたことを次々と再構築し、世界の体系的説明を試みました。この点で先きのロックと軌を一にしています。デカルトが図形の関係を代数方程式で示そうとする解析幾何学の創始者であることは、事態を象徴的に示しています。

これらの例に見られる考え方の根底には、人間理性(ratio ラテン語<sup>(2)</sup>)に対する絶対的信頼があります。これは、神への信仰に対する「自然の光」としてルネッサンスが再発見したことに端を発しますが、次第にダ・ヴィンチのモナ・リザの微笑やミケランジェロのモーセの男 性美が消失していくことばの原義通りの「計算し見積りを立てる能力」としての理性に対する絶対的信頼に変化したのです。このような理性は、眞偽、あるいは善悪、そして自己そのものの唯一絶対の弁別者、判定者とされ、人びとは一切をこの理性に基づかせようとしました。ドイツの学者カハル(1724—1804)の画期的な著書『純粹理性批判』(1781)は、その序文で述べられて

いるように、理性を批判する書物であると同時にその批判者が理性自身であるといふものですが、以上の事情がよく示されていると思います。

先きにコメニウスやルソーに触れましたが、彼らの活動時期もこの理性主義、合理主義の時代に当ります。ルソーにとつては、習慣の攢乱→意識の誕生などというプロセスは「一種の病氣」だったのです。そして、教育の理論形成が彼らによつて試みられていることからもわかるように、今日の教育用語の多くがこの時期に、つまり同じような精神で選ばれ、用いられたようあります。

次に一つだけドイツ語の例をあげておきましょう。陶冶するとか教育するといういふことを意味するドイツ語は**bilden**、またその名詞形は**Bildung**です。これは十八世紀頃、形象とか像——とくに神の像——を意味する**Bild**からいられたとされています。それゆえ、文字通りには「何かを象る」とことを意味しています。

「教える」という英語に、御存じの teach がありま す。これば、オックスフォードの辞典によれば「instruc-

tion によって何かが出来るようにならね」 やす。そし

ての instruct は「船の儀装をやる」という原義がありましす。ドイツ語の「教える」 Lehren は Lehre = 理説といふ語の動詞形です。わなみに education は ドイツ語の educo に pedagogic はギリシア語の paidagogike 由来しますから系統を別にするべきだ。

ところで、これらの場合においては、教育される者および教育する者の外側で出来上りてゐる、いわば設計図みたいなものが問題にされていて、それに従つて、例えば船を製作するといふような意味が強かつたように思ひます。

以上、いかれにしまして、人間の本質をすぐれて「理性的動物」 (animal rationale) と規定しているといふがわかります。このよだな規定は、例えばソクラテスやプラトンの知行合一説、徳の教育可能論にも見られるところでしそうが、とりわけ十八世紀において理論的に最も強く、いわばそのように信奉されたと言えるかと思ひます。

## 6 「理性的動物」への批判

考察を先へ進めるために、ゲーテ (1749—1832) の『カヘルベルム・バイスター。徒弟時代』からの一節を引用しあしらへ。主人公のヴィルヘルムは、マリアーネとのあいだに自分の子フリックスの居たことを確認した。そして徒弟時代が終つていよいよ親方修業のために遍歴の旅に出ようとしている。そのような彼と、彼を慕う薄命の美少女ミンヒの一場面です。「ヴィルヘルムは彼女に事情をこまかに説明して言つた。——お前はいっぽし理性的な子供だから、今度もきっと自分の言うことを聞いてくれると思う。——理性は残酷です、と彼女は返した。——心臓の方がいい。私はあなたの行けとおっしゃるといふく、心でも行きます。ただあなたの方リックスを私のそばに置いてください。……」

ゲーテは、ロマン主義の時代に先立ちそれを準備した「疾風怒濤」期の中心人物の一人です。そしてこ

こ「理性は残酷ですか」、つまり理性は非人間的である

と非難されています。人間を「理性」でもって特色づけるわけにはいかないとの宣言と言えます。理性——これは、先きにも述べましたが(注(2)参照)、もともと計算し、見積りを立てる能力です。そして、この「理性」を王座から降ろすということは、計算できないもの、計算の外にあるものの復活を意味します。もう一度ゲーテの同じ作品から他の一節を引用してみます。「子供(フェリックス)は一所懸命に新しいおもちゃをいじくつていたので、父(ウィルヘルム)は彼にそれをより良く、より秩序正しく、より合目的に扱わせようとした。しかしその瞬間に子供の方はそれに対する興味をなくしてしまった。——お前こそ本当の人間だ、さあわが子よ、さあわが兄弟よ! 世の中に出で、出来るだけ無目的に遊んで暮すことにしてやう!」。

「疾風怒濤」は生の哲学を生み出し、ロマン主義を生み出し、やがてディルタイやニーチェの哲学、そして現代の現象学とか解釈学を現出させ、また一方で実存主義や実存哲学の流れをつくり出しました。そしてこのよう

な流れのなかにボルノーなどの「哲学的人間学」も位置づけられます。ここで、ボルノーのもう一つの設問をつけ加えておきましょう。「われわれが人間の本質を理性から把握できないとすれば、人間は何によってその本質を規定されるのか」

理性について以上のように考えられるかぎり、ここではもはやロックの「tabula rasa」やデカルトの明晰判明な原点「我思う」のような考え方ではなく存立できません。ボルノーはこのような認識原点を「アルキメデスの点」と呼び、人間の認識にはそのような究極的始源はないと強調します。従って、出発点や到達点を外在的に設定し、この二点間を通過するための方法だけが問題になるような教育は考えられません。つまり、かつてヘルベルトが考えたような、教育学が先きにあって、目標が決まっていて、方法も決まっていて、それを教材に關係づけて四段階あるいは五段階でやつていけばよいという考え方方は、そのことを論述した著作がたとえ十九世紀(一八〇六年)に出版されたにしても、すでに十八世紀の名

残りと言わなければならないと思ひます。

## 7 言葉と教育

問題をさらに展開させるために、哲学的人間学の方向での言語哲学の所論に触れてみたいと思ひます。例えば、ボルノーの弟子の一人ロッホ (Werner Loch. 1928) は次のようなことを述べています。「人間が言葉によって、つまり聞いたり読んだりして知っているものの範囲は、自分の直観から知っているものよりはるかに広く大きい」。ここで「直観から知つてしまふ」と書いているのは、あるものの直観、つまり直接に感覚に受け取つて、それを概念にまで仕上げているといったようなことです。従つて、子供は理屈でもつて物事を知つているだけでなく、そういう物によつて成り立つてゐる世界のなかで、それらの物とつき合つながら、意味のある行動をとつてゐることになります。こういう見方は、もちろん先きのベルクソンにも通じるものです。小さな子供でも、例えは箸が使えますし、スプーンも使えますし、い

すに腰かけること、電燈をつけること、テレビのスイッチを入れることもできます。また母親のかわりにお使いに行って大根を買つてくることができます。それも野菜とくだもの違ひなど全く知ることなしにです。あるいは金銭の価値に気がくこともできるのです。

こういう簡単な説明だけからでも、言葉は単にある物の命名を意味するだけでなく、その言葉によってすでに世界が理解されているといふことがわかります。ドイツの哲学者であり政治家でもあつたフンボルト (M.v. Humboldt. 1767-1835) が言つたように、言葉は単に物を指している名前ではなく、そう名づけることによって、その物が存在してゐる世界の現解が示されている。つまり世界が開示されてゐるのです。フンボルトは次のように言つてゐます。「言葉は特定の形ですでに物を解釈していること、すなはち、その言葉のなかで育つてゐる者に無意識のうちに伝達されるべき特定の世界の見方がそこにふくまれてゐる」、「人間は諸物と共に生きてゐる。ただし言葉がそれらをかれに供給するかぎりで」。ボル

ノーはこのあたりのことを次のように述べます。「言葉

がそうであれば、人間もまたそのとおりである」、「人間はその言葉をとおして、そのようなものになる」。

例えば、日本語ではピンク色と桃色とは微妙に使い分けられています。しかし多くの場合、大人でもこの区別を概念的に説明することは困難だと思います。それは、ちょうど子供に「くだものとは何か」と尋ねたとき、「リンゴやミカンやブドウや……」と具体的個別的名称で答えられるのに似て、「こういうのをピンクと言う」「こういうのが桃色だ」と言うのがせいぜいだと思います。そしてこのような答のなかに、日本人の色に対する理解がひそんでいることは明らかですし、われわれはそれをなんとなく理解できるし、またそのような理解の上に言葉を聞き分け、言い分けているのです。さらに言えば、例えば、ギリシア人は青色ブルーという表現を知らなかつたようですし、十七・八世紀の頃は夜を茶色ブロウンであらわしたり、スミレは茶色と言い現わされたりしたようです。夜をブルーであらわしたのはロマン主義の時代（十九世紀）以

後のようです。

さて、子供は、前述のことく理解的にそれが何であるかわからなくても、その言葉を知っていることによつて、すでに世界の見方、世界理解をもつてゐると言わなくてはなりません。人間は多くのことをまず言葉で知ります。そしてそのように言葉で示されたことを耳で聞きます。文字を見るのではなく、母親のひざの上で言葉を聞くのです。そしてそれを、自分の経験をとおして一つ一つ具体的直観で満たしていくのです。それゆえ、ペスタロツチ（1746—1827）が「直観から概念へ」と言ったのを、いま述べた点で誤解してはならないと思います。これは決して直観が絶対的に最初にあると言つていいのではなくて、子供はまず言葉を知つていて、そしてその言葉で知つてゐるものと直観で埋めさせ、それからそれを概念にまでもつていけ、と言つてゐるのです。

言葉を聞くことによつて、その言葉を使うことによつて、その言葉にふくまれてゐる世界理解を受け継ぐことによつて、子供はとにかく世界を理解しているのです。

そこで、そのばく然としている理解、あいまいな理解をより明らかにすること、より厳密にすること、より純粹な形で意識化させるということが重要なプロセスとなります。従って、学校における教授法もこの方法をとるのが正しいとしなければなりません。つまり子供は、学校へ非常に多くの言葉と共に多くの理解を持ち込んできます。これら「持ち込まれた理解」が前提にならなければなりません。子供は、例えばロックが考えたような白紙の状態で学校に来るのはないのです。言葉を聞いていることによって、子供は部分的にはあいまいであって、全体としての理解はもつているのです。そうすると、教育は、そのような全体を部分へと引き戻していくことが第一の仕事となってきます。子供がまだ所有していないものの、子供のなかで空席になっているものを与えるというのではなくて、子供がもつているものを整えることが問題です。そのように整えてやれば、部分が明らかになり、部分が明らかになれば、やがて元の全体がより明らかになり、全体がより明らかになれば、新たにま

たわからない部分がよりあらわに見えてくるようになります。<sup>(3)</sup> その部分を明らかにすることによって、また全体に戻ってくるというぐあいに、子供が理論的でない、まだ十分知識になつていらない形で理解しているものへといつも帰つてくるプロセスが重要なのです。先きに述べた十七・八世紀頃の合理主義では、このような点が見落されていました。そこでは、教育がいわば直線型で考えられていたのではないかでしょうか。しかし、以上のように見てくれば、教育はむしろ循環型であると言えるかと思ひます。

## 8 「学ぶ」ということ

「学ぶ」、「学べる」という語に当る英語の learn は、同じ意味のドイツ語 lernen ルネン とその出生は同様です。そして後者のドイツ語は、ルーハル Lehren (教える) とも同じが問題です。そのように整えてやれば、部分が明らかになり、部分が明らかになれば、やがて元の全体がより明らかになり、全体がより明らかになれば、新たにま

が原義とあります。「学ぶ」に当るフランス語 *enseigner*<sup>ア・ゼ・ニエ</sup> や *apprendre* も、もちろん言語の系統を異にしますが、

原義としては同様の意味をもっています。そこで、知識の習得を、それも十七・八世紀の合理主義が考えたような直線型の習得を学習と言うならば、その意味では子供は本当は「学習していない」と言うことができるのではないかでしょうか。そして循環を示す側面を、その意味ではもはや学習<sup>ラーニング</sup>と呼ぶことができず、むしろ理解の枠組が次第に精密になり、拡大されていく過程、つまり「理解の過程」と言わなくてはならないと思います。そしてこの循環する相においてこそ、現代の教育において最も欠けている。それだけに最も強い関心が払われるべき「子供の世界、子供の生活へと戻り道のついている教育」が意味深く位置づけられてくると思うのです。

## 9 結び

もう一度、ボルノーのフレーベルへの関心を手引きをしながら話を結ぶことにします。

ペスタロッチは無味乾燥な、色あせた概念から直接的な感覚的直観へ還帰すべきことを説きました。しかしこの場合、その説く直観は、それ自身は意味のない素材としてのものでしかなかったように思います。それを意味づけ、解釈するのはやはり悟性とか理性の仕事、つまり思惟において始めてなされると考えられているように思います。ペスタロッチは、この点でなお感性が直観として素材を受容し、理性が思考形式としての範ちゅうによってそれら素材としての直観を整理し、そこから始めて認識が成立するとしたカント的認識論の圈内に居ると思ひます。つまり、認識の構成は意識の明るみのなかで行われるとしたことになります。しかし、とにかくペスタロッチは直観を教育の中心に置きました。そしてそのことによつて、かつてラトケやコメニウスが強調したように、教育における言語偏重 (verbalism)、ペスタロッチの著名な言葉で言えば「饒舌」「あざましい、無力で直觀力のない、口先きだけの人間」「あわれるべき書物上の知識に迷った人間」に対しても返し戦つたのでし

た。彼においては、すべての基礎は、子供の用いる概念を事柄 자체の精確な直観に戻すこと、そしてそのような直観を念入りに発展させることだったのです。この点でフレーベルはペスタロッチに完全に一致していると思いません。

しかしあれわれは、天才的個性への評価をいささかも減ずることなく、しかも一七四六年生れのペスタロッチと、それから約四十年後の一七八二年生れのフレーベルとの差に注目しなければならないと思います。この点を明らかにするために、専門的には不正確かもしれません。手がかりの一つとして芸術、とくに音楽の歴史について簡単に触れてみたいと思います。ペスタロッチより六才年長にハイドンが居ます。ゲー<sup>テ</sup>は三才年下です。モーツアルトは十才年少ですし、ベートーベンは二十四才年少で一七七〇年生れです。一方、フレーベルより十五才年少にシユーベルトが居り、二十八才年少にショパンとシユーマンが居ます。おわかりのように、私が述べたいのは、ハイドンやゲー<sup>テ</sup>との関係から言つても、ペス

タロッチは古典派の時代に属し、それに対してもフレーベルはロマン派最盛期を知っているということです。教育の理論形成に関して触れたコメニウスやルソーは、むしろバロック時代に属します。ここでは各時期について詳しく述べられませんが、バロック時代(十七・八世紀) ↓古典派時代(十八世紀) ↓ロマン派時代(十九世紀) という流れのなかで、フレーベルはペスタロッチの直観がなお把握の形式としてでしかとらえられていないことを批判し、むしろ、一見主観的に見える人間的能力のすべては、実は同時にそれに呼応する世界の内容を開示していること、つまり始めから内容と関係づけられていることを見抜いたと言えます。人間的能力の最も単純な訓練が、同時に意義深い象徴的行為であり、そのような訓練や行為のなかで世界の理解がなされるのです。子供においてこのことが意識的に成就されているわけではないにしても、深い層で「予感」され、それが後になつて明白に展開され得ると考えられたのです。

こうしてフレーベルにおいては、ペスタロッチのなお

外的なものであつた直観に代つて、感覚的に与えられたもののなかに同時により深い象徴的な意味を認識する能力としての「予感」が登場してくることになります。

最後に、この「予感」のドイツ語の原語 *Ahnung* についてひどいと触れておこうと思います。少し煩雑になりますがお許しください。この語は、しばしばある聞いに対する答として、例えば「Ich habe *Keine Ahnung* von Physik.」というやうに用ひられますが、このやうな文章を独英辞典に拠つて英訳しあやしむ「I have not the faint notion (idea) of physics.」となるまゝ。日本語にすれば「物理なんぞ皆知らねえ」といふことなりましゅうか。前置詞の *von* 以下の語によつては「そんなこゝへ夢にも知らない」という意になります。先ずこの獨文の下線の部分だけ独立めやう「Keine Ahnung!」(全然知りません)のイギリス語訳は、同じ辞典に拠つれば「No idea!」、トメリカ語訳では「Search me!」とか「You may search me.」といつておまか。日本語の「懶い予感がやあ」とか「虫が知れや」という表記をみると

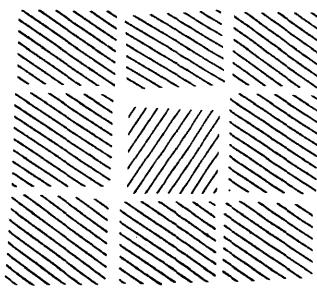
に考え方をせぬよ」と思ひます。このようないとかい、ハーベルの「予感」についてもう一度考えてみるのも、あわいはおもしろいかとも思います。

以上、「幼児のための幼稚教育」「子供も一人の人間として……」「子供の日で……」などといふ表現で言われてゐるいとはどういふことなのか、このようないか問題について私なりの一つの対応を試みてみました。少し大げさで乱暴ですが、「子供は何も学ばない、子供はすでに何でも理解していぬ」というのが結論のようです。最初にお詫びましたが、大変おこがましいことを申しあげてしまひ、お詫びします。長い時間、まとまりの悪い話ををお聞きあつたからあります。(富山大学)注(1)の語書は、原著 Die Pädagogik der deutschen Romantik. Von Arndt bis Fröbel. Stuttgart 1952(1967) の最も重要な部分である「第三編 ドイツ主義教育学の華、トーマス・ヘーベル、ハーベル」(III. Teil; Die Blüte der deutschen Romantischen Pädagogik. Friedr. Ich. Fröbel)が翻訳されたものであつて、日本英語『ハーベルの教育学』(理想社)一九七三年。

(2)この ratio から rational, rationalism などの語が出て来る。ラテン語としての ratio の根本主義は、見積り、予測、計算、算出といふ意味である。英語の reason は reasoning (推論) 基本的には三段論法につながる。(3)日本語の「わかる」も「分る」と区別する意の字を使用する。「分別」という語も、仏教語として「外界を区別して知ること」であり、分別がつく、分別かかり、分別くわいなどと用語がある。

# フレーベルに学ぶもの

上野ひろ美



## I. はじめに

フリードリッヒ・ヴィルヘルム・アウグスト・フレーベ

ル (Friedrich Wilhelm August Fröbel) は一七八二年

小学校卒業後 (十四才)、林務官の徒弟や土地測量等の仕事に従事するが、二十三才の時に建築技師になるべくフランクフルト・アム・マインに赴く。

その間、同学の志に燃え、イエナ大学に学び自然諸科学や建築学、測量術等を聽講する。当時のイエナ大学は、ワイマールのカール・アウグストを総長として、シラー、シェリング、ノヴァーリス等が活躍するドイツ浪漫主義の搖籃でありその中心地でもあった。そこで彼に、父から受けた宗教的感化は強大なものであった。

体験した内的開眼がいかに大きかったかが想像される。

フレーベルはふとしたことからフランクフルト・アム

・マインの模範学校の教師となる。この教育活動の第一歩において偉大な感化を受けたのは、ペスタロッチからであった。当時ペスタロッチの名声はヨーロッペ教育界を風靡し、その門下生であるグルーナー校長の指導の下に、この模範学校もペスタロッチ主義の教育・教授を行なっていたからである。その後フレーベルは自らペスタロッチの許へ行き、親しく指導を受け、ペスタロッチ学徒として生涯を送ることになる。

## 二、教育の目的

フレーベルの主著『人間の教育』の冒頭である

「すべてのもののなかに、永遠の法則が、宿り、働き、かつ支配している。この法則は、外なるもの、すな

わち自然のなかにも、内なるもの、すなわち精神のなか

にも、自然と精神を統一するもの、すなわち生命のなかにも、つねに同様に明瞭に、かつ判明に現われてきたし、またげんに現われている。……この統一者が、神で

ある。」(荒井訳、岩波文庫)

フレーベルの世界観や人生観はすべて神的統一に基づいており、但してこの場合の神は宗教的であるのみならず、哲学的であり、自然科学の絶対法則でもある。彼は宇宙を一大有機体とみなし、鉱物、植物、人間、天体等のすべてに一貫する統一を見る。この一貫した統一のもとに万物が存在し、万物には共通のものすなわち神性が秘められているという。しかもこの神性が万物の本性を形成しており、この本性を表現し、啓示し、発展させることが万物の使命である。教育の目的はまさにこのような使命を果たす為の道と手段とを与えることである。では、そのような道と手段とはいかなる原理によらねばならないか。

## 三、幼児教育原理

(1)自己活動の原理——フレーベルの教育原理は受動的・追随的教育であるといわれる。たとえば、それは、「教育、教授、および教訓は、根源的に、またその第一

の根本特徴において、どうしても受動的・追随的（たんじゆてき）に防禦的・保護的（ぼうごてき）であるべきで、決して命令的・規定的・干渉的であつてはならない」（前掲書）というフレーベルの叙述に基づいて主張される。

しかしながら、それは必ずしも、今日わが国でいわれるところの児童中心主義的な自由放任教育に尽きるものではないと思われる。フレーベルに学ばんとする我々は、その点を慎重に考慮しなければならない。

第一に、フレーベルによれば、いっさいの事物は神性の表現であり、その神性を個人の生活に実現させることが教育の目的である。この神性を表現させる為には、生命の内部からの発達を自由に行なわせなければならぬ。ここで彼は「発達」概念を教育に適用する。そしてこの「発達」は、子ども自身の衝動ないし意欲に基づいて生じる諸活動（＝自己活動）の中で実現されるといふ。

「発達」及び「自己活動」の概念を教育に適用したことは彼の歴史的業績である。この主張は、当時の学校の

厳格な訓練と伝統的な形式主義に対する批判として大きな意味をもつてゐた。すなわち、あたかも子どもを「欲するままにこねあげることの出来る蠟か粘土の塊」とみていた、当時の「粘土細工」的教育觀に対する痛烈な批判が彼の主眼とするところであったのである。それに対して彼は、植物の生長する姿に人間発達の象徴をみ、生命の世話と保護をなす「栽培」に教育の働きをなぞらえるのである。

「受動的教育」が唱えられたこのような背景を考える時、それを単なる消極教育に解するにとどまらず、子どもの自主的活動および自己教育の為の主体的努力を促す教育的条件のあり方を、フレーベルがどのように把握していたかという視点から、改めて検討する必要があると思われる。

第二に、フレーベルは教育によって子どもを「方向づける」ことを意図していた。周知のように彼の象徴主義を具体化した遊具は「恩物」と呼ばれる。彼の恩物論には、恩物の体系を観念論哲學から導き出したところの、

たとえば球を遊具として与えることによって「宇宙の統一」を把握させる、といった理論づけがなされている。

フレーベルによれば、幼児期において、「合法則的か

つ必然的な発達過程」に恣意的無法則的な干渉が加えられる事によって、根源的には「良い」はずの人間の諸力、諸性質の発達がゆがめられるのである。しかるにこのゆがみを生ぜしめることなく、「宇宙の統一」「生の合一」へと子どもを導くところに、彼のいう「受動的教育」の真義が存在するのである。すなわちここにおいてもすぐれて、世界の本質、人間の本質へと子どもを「方향づけ」ることを可能にするよな、自己活動を呼びおこす教育的条件のあり方が求められているのである。

(2) 共同感情育成論——フレーベルは共同感情 (Gemeingefühl) の育成を重視する。この感情はまず母と子の間に形成される。最初の表われは母と交わす子の微笑である。そしてこの感情は子の成長発達と共にやがて父、兄姉、周囲の大人、遊び仲間へと拡大されていく。したがつてフレーベルは、共同感情を育成する立場から、幼児期においては創造的で創造的な遊びと並んで集団的な遊びを、少年期にあっては創造的な労働と並んで集団的な共同労働を重視している。

共同感情は人と人との和合、人と自然との調和、人と神との一体感をつくりだす。それはフレーベルにとって、いっさいの人間的、社会的関係の基礎をなすものである。

このように集団活動を遊びや学習に導入したことは、子どもたちの園生活や学校生活において望ましい社会関係がいかに重要な意味をもつものであるかということを、我々に教えていく。

(3) 遊びと作業の理論——フレーベルは人間を「創造的存在 (Schaffendes Wesen)」と把え、それにふさわしい教育がなされねばならないと要求する。彼は子どもに「活動衝動 (Tätigkeitstrieb)」のあることを認め、この衝動を充足し育てる通じて、「勤労の為の教育」を行なおうとする。その為に、乳児期においては感官および四肢の活動を奨励し、幼児期においては遊びの教育的意義

を強調して遊びを奨励する。

「あらゆる善の源泉は、遊戯のなかにあるし、また遊

戯から生じてくる。力いっぱいに、また自發的に、黙々と、忍耐づよく、身體が疲れきるまで根気よく遊ぶ子どもは、また必ずや逞しい、寡黙な、忍耐づよい、他人の幸福と自分の幸福のために、献身的に尽すような人間に

なるであろう。この時期の子どもの生命の最も美しい現われは、遊戯中の子どもではなかろうか。」（前掲書）

こうした観点に立って、フレーベルは子どもの生來の本性を知的、感情的、道徳的に発達させるものとして、図画、粘土細工、唱歌、ダンス、積木、ボール遊び等を教育的活動として取り上げる。そして、なかでも、子どもの本性を外界に自己表現するに理想的な遊具として「恩物（Gabe）」を考案したのである。

その後活動衝動は形成衝動へ発達し、労働がひき起こされ、学習と並んで労働が少年期の生活の重要な一面をなすようになる。いわば、遊びが教育の出発点となるのに対して、作業＝労働はその帰着点ともいえよう。

#### 四、おわりに

フレーベルの幼児教育構想のさらなる特徴として、幼稚園を、当時すでに国民教育制度の一貫として位置づけていたこと、めざすべき幼児教育を担う保育者養成に力を入れたこと、等が指摘されよう。

フレーベル生誕二〇〇年を迎えた一九八二年、フレーベルの生地では彼の理念を今日に引き継ぐ幼稚園が新たに増設され、生家やカイルハウ学園等の関係諸施設には修復が施され、また、イエナ大学を中心に生誕二〇〇年行事の開催へ向けて準備が進められた。

すぐれた古典的教育者、人道主義者として今なお敬愛されてやまないフレーベルの教育思想から、幼児教育における今日的課題に対する示唆として、我々の学ぶところいっそう大であることを痛感している。（山口大学）

## フレーベル生誕二百年記念祭に参加して

松川由紀子

拝啓

先日、フレーベル生誕二百年記念祭参加ツアーカラ無事に帰国いたしました。

できました。これらもフレーベルの歩いた地です。とても感動いたしました。

イエナのフリードリッヒ・シラー大学での記念式典、シンポジウムでは、フレーベル研究の現状をおおまかにつかむことができましたし、若干の資料も入手できましたので、これから少しづつまとめていきたいと思つております。修論でフレーベルに取り組みましたかが、むつかしく、その後も思うように研究がはかどつていませんでしたので、今年はがんばつて取り組んでみようと思持も

フルト（西独）、ハンブルク（西独）にも立ち寄ることができました。また、アイゼナッハ、ドレスデン、フランクフルト（西独）、ハンブルク（西独）にも立ち寄ることがで

新たにしております。しかし、わが国のフレーベル研究はまだまだ遅れているという印象を受けましたので、正直なところ、これは本当に大変だらうと思ひます。

記念祭は、四月十九日午後、シラー大学講堂にて、同大学オーケストラによるヴィヴァルディのシンフォニア・ハ長調第一楽章の演奏が高らかに響きわたるとともに

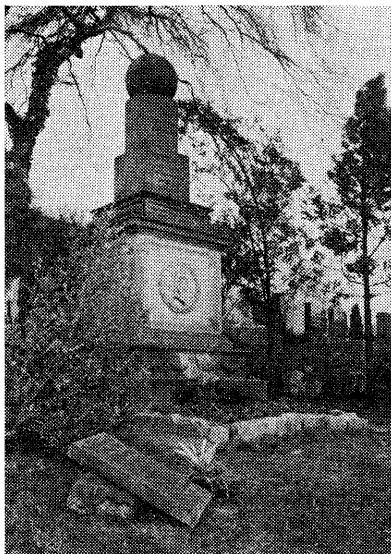
開幕し、同大学総長ボロック博士のあいさつ「イエナ大学の十八・十九世紀頃の伝統」、記念祭実行委員長ギュンター教授の講演「フレーベルの業績と現代への影響」が力強くなされ、その合間にニューマンの「子どもの情景」などが演奏されて、会場の雰囲気が一層盛りあがりました。その後、歓迎の夕食会、レセプション。

二〇日。シンポジウム。午前中は全体会で、実行委員会による基調報告。午後は分科会（A、B）で、各國代表による研究発表。Aグループでは、莊司雅子先生が研究発表をなさいました。ランゲ編『フレーベル全集』を訳された方であると、司会者のギュンター教授が尊敬のまなざして紹介したため、会場は大変な拍手で、とても

熱心な雰囲気でした。先生のドイツ語はききとりにくいものだったのですが、全員が真剣にきいておりました。

ところが、「子どもは神の賜物であるから」と発言なさったとたんに、会場はざわめき、私語は乱れ、聴衆の態度もゴソゴソし始め、立ち去る者も多く……。一時はどうなることかと思い、こちらも不安になりました。神をもち出すと科学、学問ではなくなるためか、通用しない様子でした。しかし、こうした反応は、日本では考えられないのではないかと思ひます。国際会議の恐ろしさを

（撮影 烏海榮）



感じるとともに、フレーベル研究のむつかしさをあらためて思い知られ、考えさせられました。なお、B・グループでは、副島ハマ先生が研究発表をされました。そして、夕食後は、昼間の疲れをいやすように、詩と音楽のタバ、それにワイン休憩。

二十一日、フレーベル生誕の日。生家のあるオーベルワイスバッハを視察。生家前には町中の人々が集まり、高らかなブラスバンドが私たちを迎えてくれました。生家前では祝賀式が挙行され、フレーベルのプロンズの胸像が除幕されました。そして、各国（十二カ国）からの招待者百三十名余がいくつかのグループに分れて、順次視察。生誕地のフレーベル博物館として改築された生家、伝統のあるフレーベルタワー（幼少のフレーベルがひとり自然の中でさみしさをこらえた山頂に、一八九〇年に建設されたもので、フレーベルを愛する地元の人々の歴史が刻み付けられている旨、詳しく説明を受けました）、そして、フレーベルの父親が働いていた教会の裏手の丘に新設されたフレーベル幼稚園を視察。

なお、記念祭に先立つ四月十七日夕方、フレーベルが

二十二日。フレーベルが（幼稚園創立前に）教育実践をしていたグリースハイム、カイルハウ（ともに大変な寒村）を視察。この視察は東独側のご好意で急ぎよ実現したもので、あたりの自然環境はあたかもフレーベル教育の真髄を示唆しているように思いました。その後、バート・ブランケンブルクに。市庁舎前の小さな広場では歓迎のブラスバンド。世界最初の幼稚園の建物が装いも新たにされて、この日開館された国立フレーベル博物館を視察。そして、ウイルヘルミネ夫人の墓を参り、第四幼稚園を視察。子どもたちが楽しそうに円陣遊戯をしておりました。その後、記念碑のある公園を散歩し、第二幼稚園の園庭を見学。なだらかな丘陵をそのまま生かしている園庭で、全く自然に近い感じでした。夕方、ルードルシュタットの丘にそびえるハイデックスペルク城のロココホールでお別れのコンサート。あまりの豪華さ、豊かさにしばし時を忘れたものでした。以上が記念祭のおおまかな様子です。

はじめて教師になつたフランクフルト、翌十八日、フレーベルが感動をもつてよく訪ねたアイゼナッハのワルトブルク城、そして、フレーベル終生の地方、バート・リーベンシュタイン、マリエンタール、シュワイナなどを見学、墓参。記念祭の後は、フレーベルが幼稚園普及運動のため旅行したドレスデン、ハンブルクへ。（チエコスロバキヤのプラハにも立ち寄りました。）

という内容の二週間の旅でした。とても充実していた旅行であったと思います。

フレーベルの活躍した地は、そのほとんどがチューリンゲンの森の中、自然の美しい地方でした。そして、多くの幼稚園はその美しい、なだらかな丘陵をそのままとりいれて園庭にしていました。チューリングの森、丘の美しさは言葉ではとても表現できません。

ゆるやかな丘陵、高い空は人の心をやさしくつつみ、特

乱筆、乱文をお許し下さいませ。  
礼申し上げます。

敬具

松川由紀子

しづつ人々に理解されるようになったことを、静かにひとり考えておりました。チューリングを旅してはじめて、フレーベルと対話できるような感じさせいたしました。

幼稚な英語、独語で各地の人々と身近に接し、国際親善も充分にしてまいりました。プラハでは、国営ラジオ放送局の英語のインタビューにも応じました。今考えると、よくひとりでやれたものだと自分でも驚きます。旅は人間を積極的な性格に変えるのでしょうか。しかし、

同時に、もっと語学を学んでおかないといけないことも痛感いたしました。同行の方々（十六名）とも親しくなり、その点でもとても幸運な旅でした。

以上、とりとめもなく記しましたが、このあたりで失

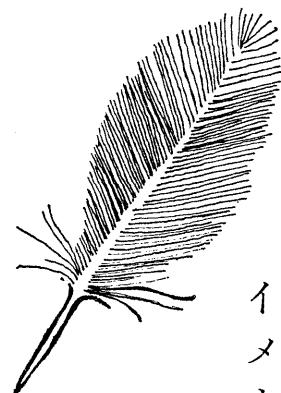
し、また、子どもたちの遊戯祭が行なわれ、幼稚園が少し、また、子どもたちの遊戯祭が行なわれ、幼稚園が少

津守 真先生

五月七日

## イメージへの散歩

菱川 敦子



### 幼児と保育者のイメージのちがい

職員室にいる私の耳に、水がなにかにあたってはじけるものすごい音がきこえてきた。

幼児たちがどんな遊びをはじめたのだろうと、すぐ外の手洗い場へとんでいくと、サントリーの生ビールの金の空樽を置いて、水道の蛇口を開いて水を出していい。水はすごい勢いでその空樽にあたり、上へ五十厘、左右に一米くらいの半円を描き飛沫をあげ、そのままで

男児二人が、手をたたいてこおどりしながら歓声をあげているのである。私からみれば、それはちょうど、舞台の上でライトに照らされた色さまざまの噴水の中で、小人が乱舞しているかのようにみえた。私は、「わあー、すごい」。そのあとへ“きれいな噴水”といいそうになつてやめた。それは、今まで幼児と共に通のイメージをもつという指導の基本が、あまりにもくいちがう自分であるということが、意識の中にあったからである。

幼児たちは、そんな私の感嘆の声に、「先生、花火大

会や」と、さも得意そうにいった。その言葉をきいた瞬間、私の心中は空白状態になり、やがて、『徐々に、やはり、幼児と私のイメージはちがっていた』という、やるせない気持に襲われた。

このように、音、色、形、光など、まわりのさまざまな刺戟を受けて生み出される、幼児と私のイメージは全くちがうことが多い。そのため、幼児と深くつきあうほど、私は指導の迷路へさまよつていく自分を意識した。たえず不安定な状態におちこんでしまった。

### 幼児のイメージのひろがりと保育者の共感

砂遊び場で直径五十粩くらいの大きさにつくった池の上に板ざれの橋を渡し、その上にのつかって、まことにおちゃわんで水をすくっているかのようにみえた男児が、「先生、ちょっときて」と呼びにくる。私は、「御

招待ありがとう」という返答を心の中でくり返しながら近づくと、この幼児は、「先生も金魚すくいさせたらか」と、池の中に浮べた赤いバラの花びらをすくつていふ。 「わあー、金魚がいっぱい」。そして、『バラの花びらを金魚にみたてるなんて、すてき』と、うれしくなった私の心は、前述したように空白状態にならず、さそわれまるまに金魚すくいに興じた。私は、『こんなすてきな金魚すくいは誰も思いつくまい』という想いと同時に、あたかも、この幼児と縁日にきて金魚すくいをしているかのように思った。二人がすくった金魚が青いバケツの中の泥水に浮かんでいるのを見ていると、もしも、この幼児に呼ばれなかつたら、幼児とともに遊ぶことがなかつたら、私は、この赤いバラの花びらにどんなイメージを投影していたであろうか。きっと貧しいイメージだったにちがいない。幼児の要求を受容し、ともに遊びに熱中したことで共感することができ、幼児と私のイメージの距離が少しでも近づいたのではないかと、うれしくなつた。

### 愛情はイメージへのかけ橋

新の母はもう二十日ほどで出産日を迎える。そんな母

あらた

に甘えられない心の乾きを、この幼児は私にぶつけてくることが、一日一日とはげしくなつてくる。「チャアチャン、チャアチャン」「おうぼ、おうぼ」「私は、赤ちゃん」と背中へとびつくと、そばにいた、奈緒、真琴、しのぶまでが「私も赤ちゃん」「私も」といつてぶら下る。こんなときが私のいちばん困るときで、言葉や行動で解決する方法がわからず、ただ幼児たちにもみくちゃにされている。やがて新の強引さか、私の気持を察してか、真琴は、「私は十才の中学生」、しのぶは、「私は先生になる」、奈緒は、「私は幼稚園の子」と、あきらめ顔で役割を宣言する。

新は、「チャアチャンとねんね」と、保育室の隅のマットの上へ私と二人でねむる。

奈緒は、「お母さん、幼稚園へいくの送つていってよ」というが、私はなんだか起きる気持にならず、「赤ちゃんおねんねしているから困つたわ」と、逃避するような言葉をいつてしまつた。「そしたら、赤ちゃんおんぶして送つてくれたらしいのに、そんなお母さんようけお

るよ」と、怠け心を出した私をみすかすような返事が返ってきた。私は、苦笑しながら新をおんぶして、奈緒の手をひいて幼稚園へ送つていくことにした。新は私の背中の上でべつたりと赤ちゃんがねむつたふりをしている。そんな遊びがづく中で、新は起きると、「ミルクがほしい」というので、私はとっさの思いつきで、職員室の白いすいとうの中へお茶を入れにいった。そのときは、すでに、奈緒はお姉さん役の真琴に幼稚園へ迎えにきてもらつて帰つていたので、四人の幼児たちは私のあとから赤ちゃんのように這つてくる。お茶を水筒へ入れる間、私のそばで四つん這いになつて一列に並んで、赤ちゃんがミルクをのませてもらおうと、まさに口をあけようとして私をみつめている表情をみて、この演ずることのうまさと、そしてかわいさに思わず目がしらがあつくなる。あとから思えば、奈緒も、真琴も、しのぶも、この時は赤ちゃんになつていていたことに、私は、なんの不思議さも感ぜずに、ひとりひとりにミルクをのませていた。しかし、この場合、お茶をミルクにという私のイメ

ージに、幼児があわせてくれたこと、それはよかつたのであらうかという迷路の入口へ立ってしまった。ともわれ、この幼児たちと保育者の愛情のかけ橋としてイメージも存在し、遊びが進められていくという、私なりの自分勝手な理屈で解消してしまった。

### イメージの花のたゆとう野辺へ

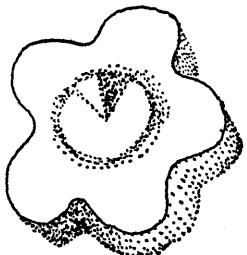
幼児のイメージの中に毎日どっぷり漬つていると、ますます不可思議なことに出会う。

ホールの壁面に、私は、二米くらいの大きさの水色の傘をつくつてはり、細い水色のテープを斜にはって、雨の日の情景を描いたつもりである。その傘の下へ、みどりと、順子、美奈、奈緒の四人は、「雨がふってきた。雨やどりをしようよ」と、肩よせあつて雨やどりをして眠つてゐるふりをしている。偶然、こんな場面に出会うと、私は、どんなことが始まるのだろうかと、胸がときめいてくる。四人は一分間もたたないうちに起き上り、水色のテープで表出した雨に頭をくつづけて、「シャ

ワーだ、頭を洗おう」と、両手で頭の髪の毛をかきまわしながら、シャワーの下を走りまわつてゐる。私には、それがまさに劇的なシーンとして目にうつる。セリフを覚えて行う劇的活動より、より劇的な生きたシーンとしてみえるのは、幼児のイメージの自由さからくるものであらうか。そして、このシーンの中で次々と変化するイメージをみていると、ただ不可思議だとしかいえない。

K・E・ボウルディングは、「イメージは未分化で、もうらうとして動きやすいものでできている」と述べてゐるが、私は、幼児たちをみていると、この言葉がぴったりあてはまるような気がしてならない。さらにつづくれば、幼児のイメージは、あの内面の世界につきつぎと咲きつづける、美しい花ともいいたい。

幼稚園という野邊にたゆとう、千變万化のイメージの花々、毎日、この中を散歩できる私は、保育者という名をもつ人間としての幸を味わいながら、幼児たちに、どのような返礼をしたらいいのかと思い悩んでゐる。



## 台所でひろつたテーマを

平野 美那世

### ——金属商へ嫁いで——

「お宅のご商売は金物屋さんですって……、おなべややかんなどを売っているんですか」「金は値上りするん

でしょうか」といった問い合わせのことばを私は今迄何度も聞かされたことだろう。

今から丁度二十六年前、私が嫁いだ「合名会社平野清左衛門商店」という古風な屋号の店は、金属屋といってマストアでは、私自身営業時間中は家事の手伝いに明けくれた毎日であった。

商家は、サラリーマンの家庭とは違ひ家族が三度の食事をきちんと家でとるのである。食べるという営みは体むわけにはいかず、毎日のこととなると、炊事係の若い主婦にとっては時にはつらいこともあつたが、もともと地金商で、主に元素周期表でてくる金属元素（貴金属と放射性元素を除く）のかなりの種類を販売していくに励んだのだつた。

そのうち男女一人ずつ四人の子供達が次々に生まれ、我が家の人口は急増した。家族の健康管理をつかさどる私は、台所の仕事にますます時間とエネルギーを費やすことになり、調理をしながら、そこで起るいろいろな現象に興味をもつようになった。私は金属屋のオカミサン

という職業柄か金属製品には関心があり、特に台所で私の手となって働いてくれた金属製器具、たとえば鍋、包丁などの変わりゆく顔や姿を眺めては、さまざまな疑問を持ち続けてきた。

「鉄のフライパンは油を十分なじませて使いこむと焦げつかなくなるのはなぜだろうか」

「アルミ製の鍋でこんにゃくをゆでるとなぜ黒ずんでしまうのだろうか」

「酢を煮るのにアルミの鍋を使つても大丈夫だろうか。また重曹液のようなアルカリ性の液で、山菜のアタク抜きや、硬い豆を煮たりするがアルミが溶解しないだろうか」

### ——夢がかなえられて——

今から九年前、姑母は二年余りのねたぎりの闘病生活

の後、旅立つて行かれたが、長男中一、末娘小二、私は四十才、結婚十六年目の春だった。この年、夫の理解と協力のお蔭で私は永年の夢がかなえられた。それはM大学の機械工学科へ研究生、聴講生として勉強することを許されたのであった。

我が家商品は、調理でたとえてみると、調味料のようなものが多く、従つてお客様からは使用法や性質などまでさまざまな質問が寄せられる。夫曰く、無料相談承り所だそうで、私も結婚以来夫に教わりながら門前の小僧よろしく電話の応対などして來たが、どうも不安で、もし機会があつたら少し専門的に勉強をしてみたいとい前から願っていたのだった。家の仕事もあり時間の制約のある中での聽講であつたが金属材料学、金属表面加工学などいくつかの科目を選び、若い男の学生達と机を並べたのだった。老化現象はいたしかたないにしても、勉学意欲だけは恵まれた娘時代とは比べものにならない程旺盛だったように思う。

### ——台所での疑問にむかって——

また何か実験研究もしたいと思つたが、テーマはいく

らでもあつた。何しろ私の人生のかなりの時間を過して

きた台所で起る諸現象には、不思議なこと気になることがたくさんあつたのである。そこで指導してくださる教授の所へ相談に伺つたところ、私の話をきいてくださつてから、

「平野さん。こういうことは生活のために大切なことなんだが、男社会では価値を認めてくれないから誰もやらないね。あんたがやるのが丁度いいよ。」

とおっしゃられた言葉はいつまでも忘れられない。そしてこの先生の言葉は、その後実験に先だつ文献調査をして実感となつたのである。

たとえば食品による金属の腐食についての研究報告は非常に少なく、実際的な研究としては、食塩水、食酢、各種のアミノ酸やその塩類に関するものや、缶詰の内面腐食などわざかであった。しかもこれらは主に食品を製造する時の機械器具類やその容器などについてで、私達が日常調理に使つてゐる調味料や食品が、なべのようないくつかの金属製の調理器具をどの程度腐食するだろうか、といった研究はまったくといつていいくほどされていなかつたのである。

### 台所が実験室

そこでまず手始めに、調味料などを実際使う条件に近い濃さに作り、一定の大きさに切つた鉄やアルミニウムの板を浸漬して腐食減量をはかるという実験をしてみた。この実験では、小数点以下五桁迄計れる精密天秤を使い、一定時間毎に試験板をとり出しては減量を計るという単純でしかも精確さを要求される作業を続けなければならなかつた。そこで長時間、家を外にするわけにはいかない私は、わが家の台所を実験室にすることにした。元来私は装身具などには欲のない方であつたから高価なものを持つことがないことを口実に、精密天秤を買ってもらうことに成功した。その他ビーカーや浸漬瓶、試薬などをとり揃え、J I S 規格他の腐食試験法を参考にして実験を開始した。浸漬時間は、六時間、十二時間、二十四時間、二日間、三日間……三十日間と一定時間が来ると試験片を引きあげてはその減量を計つたのだった。実験の出来る時間は大体夕食の後片付けが終る八時過ぎであったから、浸漬時間によつては試験片を真夜中や早朝に引き上げなければならなくなり、この実

験は自分の家でなければ出来ないことだと思った。そして試験液の種類は二十余り、試験片は同条件最低三枚は必要なため予備実験も含めてそれぞれ一〇〇〇枚以上テストをした。明けても暮れても同じような作業をするうちに液のPHや食塩濃度その他いくつかの要因で腐食の状態が違うことがわかつてきただ。たとえば鉄板では食酢やこれに食塩を加えたもの、二杯酢などで特に腐食されやすく、アルカリ性の重曹液ではほとんど腐食されなかつた。また、アルミニウム板では特に酢のように有機酸に食塩を加えた液に腐食されやすいことがわかり、戦時中日の丸弁当で梅干を毎日もつてきた友人の弁当箱の蓋に穴があいていたことや、アルミ箔へ包んだ梅干をいただき、しばらくそのままにしておいて箔がボロボロになつたりしたことを思い合せたのだった。

また、こんにゃくのゆで汁のようアルカリ性でカルシウムイオンを含む液がアルミニウムの表面を黒変させる現象は、電子線回析にかけて検討した。

その後、鉄のフライパンの焦げつき現象について、テフロンは摩擦系数が低く焦げつかないことにヒントを得

て、各種の条件の鉄板を作り、摩擦系数測定器を借りて測定した。そして赤外線分析をした結果、鉄のフライパンの表面では油が熱で分解し、さらに脂肪酸と金属が強固な化学吸着幕を作るため、潤滑効果が出て油なじみを良くするということが考えられた。これらの結果は、ホットケーキ焼きのテストでも効果が認められた。

その後、圧力なべや無水なべの実験にもとり組んでいる。

以上のように台所で調理をしながら気付いたこと、疑問に思ったことをテーマに取りあげて細々と実験を続けてきた。しかし私のように高度の実験機器もなく、台所でやれる実験には限界がある上、主婦的発想でたてる実験計画にはずさんな点が多い。これらの研究を何とかまとめることが出来たのは、いつもご親切に指導して下さった研究室の方々のお力のお陰と深く感謝している次第である。

私は、今後も台所の片隅の小さな疑問を追つて細く永久研究を続けたいと願っている。

## 母の故郷 ⑦ (最終回)

——福永津義・人間とその仕事——

高橋さやか

### 1 己がうちなる故郷

母であること。女であること。

否応なしな、最もアприオリな実存として自分自身のあり様をそう見定め、それを天職と自覚・認識して、その生き方に徹した、福永津義の一生は、この一事に尽きると言つてよいと考える。

津義の性格の代表的ともいえる特質は、「率直さ」に

ある、と筆者はうけとめているが、その面から見れば、女々しい、という感じは全くなかつた。率直で、剛毅

で、沈着で、穏和であり寛容であつた。

若いころは、しかし、かなり気が弱く神経質な一面をもつており、気おくれするたちでもあつたらしい。その一方で、男子に負けるか、という気持ちや、ご都合主義や因循姑息などを敢然と排除しようとする向う意氣もあつたらしい。「母の面影」の記述中には、はじめて寄

宿舎で室長になつたとき、母の励ましの手紙によつて、どうにかその任を負うきもになれたことや、一方では、中等科二年在学のころ、クラスで結束して学校の衛生・医療に関する施設やシステムの改善を迫つて校長・校医に「意見と要求とを提出」し、「謀叛人の首」と言われた、というエピソードがのこつている。学校の廊下での行き合ひに、気に喰わぬ人には、枕草子を引いて「袖几帳して通りはべり」とばかり実際にそれを声に出して袖をあげて通つた、というから（その相手は、どうも当時活水と兄弟校として隣接もし、授業等でも交流のあつた鎮西学院の男子学生であつたようである）（これは話に聞いただけで、文としてはのこつていなし）相当なつぱりであったのである。紫式部よりも清少納言に痛快さを共感し、男ものの紺足袋をはいて歩いたこともあつた、ともいうから、津義にもそんな稚氣衝気があらわな青年期があつたのだと、いささかの感慨がある——筆者自身、こんなところばかりは多分に似ているようだ……母としての津義には、もう、そんな気配はなく

なつていたから、筆者は、自分ばかりが、男の子とつぱりあつたり、反面、男の子の方が友だちとしてつきあつて面白いし、親しめる、と思つて、若いころの母にもそんなところがあつたのかと、奇妙に安心したりしたのだが、今、自分が老年期に入つてみると、やはり、母の方がはるかに早い時点で円熟していたこと、それでいて若いころにはたしかにそういう稜角ももつっていたことが思われるに違ひない。ちなみに血液型は母も私もB型である。――

それはともかく、津義の母らしさ、女らしさは、質実剛健というか、穏やかではあるが如何にも骨太で安定的な特徴が大きかつた。それは、フレーベルに従つてくれ返し自他に対しても説きつけたように、本能を叡智に、感情・直観を、自覚と認識——聰明な洞察と予見の能力に、生れつきを天職に、まで高めようといそむ、敬虔な精神（その原点に信仰がある）のたまものであつたに違ひない。その意味で、津義はほとんど不斷に意識的で

あり、かつ努力家であった。一見天衣無縫のようにも見えたが、いつもよく考え、心づかいをし、努力していた。天性素直なところがあつて（よく「お人よし」といわれ、それがしばしば「お馬鹿さん」を意味することをそれくらいは感じていた、といったことがある。他人は「お馬鹿さん」といつても、親はみとめてくれている、と感じて一層親を信頼した、ということも聞かされた。また、「だまされてもいいじゃないか、でも、自分は人をだまさない」と一種ひらき直った気概も示したりした）。身辺の誰かれに、見るべきものをみとめるとして手本にし、学びとろうとするのである。案外に気の小さい、心配性なところは、講演など頼まれるのは度々のことで何ほどのことでもあるまいと思われるのに、いつも間際まで「どうしよう、どうしよう」と不安がるところなどにのこっていた。「はじめの切り出しと結びのことば、それが定れば大てい話はできる」といながら、そのはじめと結びを一応定めても、それでいいか、どうだらうか、とおろおろしたりする。そのくせいった

ん講壇に立つてしまふと、落ち着いてよどみなく、適切に事例などをあげながら、録音をそのまま起しても、よけいなくり返しや言いまちがいのない「通る文章」になつてゐる、といわれる。それも「かなりな名文」をしゃべるのである。それでいてまたしても講演の前になるとおろおろするので、傍のものは呆れたり笑つたりしてしまふのが常であった。

自分が率直であったから、かくしごとや嘘ごまかしは許さなかつた。

「思つた（考えた）時にはもう（実行に）とりかかっている」と言われ、それは自分でもみとめていた。仕事について果断であり即戦即決型であった。

第二次大戦中、西南保母学院——福岡保育専攻学校を預つて、テニスコートを忽ちガ諸番にし、千隈の（当時は山の中であった）西南学院の飛び地に、女子学生と僅かな専任の女子職員だけで、地下壕の校舎（本氣でそこで学校をつづける覚悟でいた）を作ろうとしたり（一、二の西南学院本校の男子の先生が手伝つて下さつたが）、

そのまた用材に、炭坑用の坑木の払い下げをうけるために、県と軍部とに交渉したり（小倉師団の要路者と話をつけたようにおぼろ気ながら記憶している。……少将、とのみで肝心の姓名は失念した）、ミッショングスクール撲滅論が大真面目で叫ばれている中で、無鉄砲にも思え行動力を発揮した。尋常小学校が国民学校となり、児報国とやら、人材確保（…）とやら言われて、とにもかくにも保育は有用重視される一面をもつてから、例によって一途率直な真摯な勢いが、官庁や軍部に押し勝つ形になつたのであろう。幼稚園の子どもに毎朝、當時義務づけられていた「東方遙拝」をさせるのに、はつきり「天皇陛下、お早うございます」と、「朝の挨拶」として言わせたので、「遙拝」させるべきなのに「挨拶」とは何事、しかも「天皇陛下」と親しげによびかけるのは不敬至極、と難じられ、「陛下の赤子、といわれる我々國民が、國の父と敬慕する方に礼儀正しくご挨拶申し上げるのが、何が不敬」とひらき直って、——この時、その坑木払下げの件で面識のあつた少将閣下が、「いや、

福永さんの言われるのは結構。それでこそ幼い子どもの愛国心が育つのだ」と一声あって、不敬問題のケリがついた、という事件もあつた。ここには、明治の人間、愛國者、そしてキリスト者である津義の面目が、かなり浮き彫りになつてゐるといえよう。純真に日本の國を信じて愛しており、しかしながら天皇は決して現人神ではなく、当たり前の人間である。但し、國民を愛し君主として責任を負つて下さる方である、と敬重している……言つてみればそのような精神のおき所が、津義のものであつた。

津義の愛国心は、以前にも僅かながらられた。徳富蘆花に極めて近いように思われる。蘆花のいう「日子日本女」としての日本人意識は抵抗なく津義のものであつた。そして、蘆花が公然と時の政府のやり方に反撥批判の講演をし、憚らず批判をこめて天皇への直訴状を公開したように、愛する日本國のすることでも、具体的な事態を目前にすれば、批判や義憤を抱かずにはいなかつたし面でをあげて直言することも辞さなかつた。たとえば

夫、盾雄とともに、朝鮮に対する植民地政策の暗黒面にふれでは、当然に手痛い思いを経験したに違いない。ただ、政府の政策については敢て批判も抱き、権威権力に對しては、いつも背骨を屈しない心意気をもちながら、

祖国そのものを愛することにはいつも熱心かつ忠実であった。その美しいところ正しいところを大切にすることについて勞を厭わないひたむきさをもつていた。

津義は戦争が敗戦を以て終つても、戦前・戦中・戦後で、特に国に対する思いに変化を見せていない。また、自分のしてきた教育について、何ら間違つたことをした、というような思いももなかつた。

事実、津義は、戦前にも戦中にも戦つて死ぬことを美化したこと、まして激励したことなどもなかつたし、終始一貫、一人ひとりの子どもが、彼自身であること、神に愛される人間であること、自分自身を生かし、他と協調調和して成長しつづけること、自然の中に神の摂理を見出しさること、をひたすら希求することしか考えなかつた。一人ひとりの子どもについてそうであるように、

日本の國についでもまた——日本は日本自身であるべきであり、その日本は神に愛される國であるべきであつた。日本は日本自身を生かすために全力をあげてあらゆる働きをつづけるべきであった。

日本昔話の中では、「花咲節」を最も評価し、痛めつけられても殺されても恨まずに、その悲しみの中から再び生命を育て、灰から花を咲かせるところの根こそ、日本の国土の深層に培かわれた純真な精神なのだ、とうけどめていた。従つて「桃太郎は桃から生れた赤ん坊に、自然の愛児をみとめ、「氣はやさしくて力もち」で、おじいさんおばあさんを喜ばせる若者に成長した、ところで終つてよい話と見ており、「猿蟹合戦」は復讐が主題の話として、子どもたちにわざわざ聞かせるまでもない、と切り捨てていた。自然の寵児、ということでは、「桃太郎」より「金太郎」の方が一層生き生きと力強い、といふ民話研究家の説にも大いに共鳴していた。

津義の思考の中に、侵略や利権のための謀略などは全くないものであつたから、そのような傾向がある

ものに敢てかかわることはしない氣もちら強かつたと言えるようである。「猿蟹」をとりあげない以上に、グリムの、ことに知恵の勝利を強調した話は好まなかつた。

津義が敗戦をむかえても何一つ自己否定をする必要をみとめなかつたことは、明治の人間のもつてゐる一種オボチュニストに似た性情によるよりも、徹頭徹尾「生きることに誠実」であり、「生命を生み、生命を育てるもの、それが母であり、そのいとなみが、女性の天職である」その天職以外に生きようがない。その生きざまがもたらす当然の事態であつたに違いない。事実、津義が一途に終始したその生き方は、たしかに、戦前戦中戦後を通じて、というよりも、戦前戦中戦後にかかわらず、誰からも阻まれなかつたし、また、津義自身にとって一ときもゆるがせにはできない、ゆるがせにされようのないものであった。

津義は、空襲が激しくなりまさるころ、戦災孤児あるいは疎開先をもたない子どもたちのための収容施設として、保育専攻学校の第二附属幼稚園として設置した「早

緑幼稚園」（神戸の自設園の名をとった）（第一の附属園は、設立は、西南保育学院→福岡保育専攻学校よりも遙かに古く、もと福岡バプテスト教会附属舞鶴幼稚園で、

西南保育学院創立と同時に移管され、今日の西南学院舞鶴幼稚園、である）を、当時（昭和一九一一〇年）みとめられていた幼稚園から保育所への移行措置や二重申請（幼稚園と保育所の一枚看板をかかげることが認められた——「戦時保育所」設置基準、によつて——）に応じて全日制（二十四時間保育）の保育所「早緑国児園」として申請していた。戦災孤児の収容に至る前に敗戦となつたが、敗戦と同時に、福岡市内に棄児——それも生後二、三ヶ月とはたたないうらいの赤ん坊の棄児が続出、といつてもいい事態が現出したのは、人間のどのような心情に由来する現象であつたろうか。その、棄児たちが、早速、というように委託（福岡市民生局児童課からの）され、直接「一時保護」されていた警察から引き取る形で、男児四、女児三、の計七名の赤ん坊を収容したのは、敗戦直後の八月の中であった。九月に入つてで

あつたと記憶するが、博多に入港した旧満州からの引揚船に、大陸を苛酷な状況の中で——無蓋貨車で運ばれて引揚げる途中、母を失った姉弟第三名、保護者が不明になつた女兒一名（三名の方は姉が非常にしつかりしていたので、かなりよく事情がわかり、のちにはかかわりあいも確かな親戚の所在がわかつて無事に両親の故郷に帰つていつた。一人ぱつちになつた女兒の方は、四歳くらいらしくも推定されたが大へん衰弱してて、一見二歳くらいにしか見えない様子があり、一切身許など尋ねかねた）がいて、その子どもたちも、収容された。特別配給として脱脂粉乳が、唯一の非常措置の支給であつた。その、しつかりした引揚の姉娘が、健気に園の生活に感謝もし一生懸命協力しながら（十一歳であつたと思う、筆者の記憶にまちがいがなければ）、「あの、……また、南瓜の茎ですか……」となきなさうな声を出したことが思い出される。さすが苦勞辛酸、死地をくぐつてきた少女も、とにもかくにもの落ち着きどころの、食糧の乏しさには閉口しないではいられなかつたくらいであった。

が、それでも子どもたちは一人（収容された時、吸乳の力もない程弱つていて、一週間を経ずになくなつた）を除いて無事に育つた。（子どもたちは早い子が一年後、大体昭和二十七年ころまでにはそれぞれ確かな養家を得、あるいは前記のように責任をとり得る親戚にひきとられた）

昭和二十一年（一九四七）年、児童福祉法が制定され、「保育に欠ける」子どもたちは改めて法的措置をうけることになるが、津義の仕事が、公的なよりどころが国家主義的な強制傾向を帶びていようが一朝にして転覆・混乱し混沌としていようが、準じて可なるところに準じながら核芯は一貫して「育つべき生命が育つ」ことを守りつづけることに密着し、しかも遂に一時も中断することなく実績をあげつづけるものであつたことは、如何にも強靭な意志と実行力を示すものと言うことができよう。

児童福祉法による保育所として、「早緑園児園」は「早緑子どもの園」となり、「幼稚園」としては閉じられた。

福岡保育専攻学校は各種学校ながら教育養成課程を認められていたが、「舞鶴幼稚園」と保育所「早緑子ども園」の二つを附属にもち、幼稚園教諭を養成すると共に、児童福祉法による保母の養成校としても厚生省の認可を得た。保育者の養成校として、保母が幼稚園教諭に改められた当時、新たな資格としての保母を併せてることをいち早く申請し、多少の難点の指摘をも押して、文部・厚生両省から、それぞれの認定をかち取ったのは、全国を通して最も早いケースであったと思われる。一九四八年（昭和二十三年）年の卒業生（三年制）から、幼稚園教諭二普免許状と保母資格と、二つをもつた卒業生を送り出したのである。

福岡保育専攻学校は、一九五〇年（昭和二十五）年、新制大学の制度に従って、そしてこの時点で学校法人西南学院の組織に正式に併合され、西南学院大学短期大学部児童教育科、となつた。

一九五二年、津義は、西日本文化賞（社会事業部門）を受ける。自分自身よりも、保育のいとなみ、そのいとを受ける。自分自身よりも、保育のいとなみ、そのいと

なみの同僚者たち、のみとめられることを願いながら、彼女は賞をよろこんだ。周囲の人々に祝われる中で、「早緑子どもの園」の子どもたち（と職員）から贈られた花束を手にした写真の顔に、心なしか最も温かなおだやかな笑顔がのこっているようである。

最早スペースが終ってしまった。

戦後になつても、保育また保育者養成の道は、（表面的には盛んになつたようであるが）真実の意味では必ずしも理解されなかつたし、仕事としても発展的である、というわけにはゆかなかつた。積極的ではあるが妥協を以て発展を意図することは肯んじない津義の方針では、一面世にみとめられているようでも、より多くの円滑を欠く事情の中で苦闘が続いた。……内情を詳細に追えば、客観的に見て津義の生涯は苦闘の連続であつた、といふ見方もできる。

しかし、津義は、結局は幸せな生涯をもつた人間だつた、とも言える。

「私は愛されている」——という言い方が日本語として、果たして素朴で安らかな、限りなくあたたかいものふところに抱かれている津義の心情を言い表すものになるのかどうか……とにかく津義は、父と母との愛の中に育つたこと、その父母とともに神の愛によって生かされる者であること、を信じて疑わなかつた。故郷——熊本、あるいは長崎をなつかしんでいたが、いつしかそれは、現実のその土地であるよりもむしろ、「神のみもと」であるような気配があつた。それはまた、どうやら、「母の在するところ」でもあるようと思われる。その母とは、筆者から言えば祖母である津義の生みの母であると同時に、津義自身が自分の内に宿している、そのように言うなら、「フレーベルがいうところの、神が我が子を見守る母の心に宿させ給う『叡智』」=「生命を生み生命を育てる真実な力……イエスがスカルの井戸のほとりでサマリヤの女に言われた『わが与える水』」なのではなかつただろうか。

「私は愛されて生きている」……そのきめちをもつた

まま、——「時」が、津義をそのほんとうの故郷につれ去つたように筆者には思える。一九六八年七月二九日、津義は世を去つた。すでに己れの内に故郷を抱いていたものが、その故郷に帰化してしまう、そういうこの上もなく自然なりゆきをもつ、それにまさる幸せな生涯はない。そういうことも不当ではない、と思うのである。

(了)

及び難い、至らない筆をつけさせて頂いたことを深く感謝いたします。

なお、筆者が卒業したのは西南保育学院です。同校は一九四四年福岡保育専攻学校と校名変更、一九五〇年西南学院大学短期大学部児童教育科となり、筆者は卒業後一年自然観察を研修して、福岡保育専攻学校教師、西南学院大短大部児童教育科講師・助教授・教授を経て、一九六八年六月に現在の西南女子学院短大に勤めるようになり現在に至つた次第です。

## 初代編集者東基吉を通してみる

### 『幼児の教育』創刊の時代（下）

国 吉 栄

東の知見であった。その意義を明らかにするために、ここで、「談話」の系譜を振り返ってみたい。

#### 第二章 学術欄

学術欄は、単に教養記事というだけでなく、当時幼稚園で行われていた「談話」の中の、いわゆる「庶物の話」

に資するためのものであつた。「鶴亀の話」（一巻一号）、「百合の話」（一巻六号）、「夏の海辺」（一巻八・九号）など、特に二巻まではその傾向が強い。しかし、それを

子ども欄にもつていかず、学術欄にもつてきたことは、

#### 「談話」の系譜

明治三一年六月、幼稚園に関する最初の単行法令である「幼稚園保育及設備規定」が文部省令として公布され、保育項目として遊戯・唱歌・談話・手技の四つが明示された。その中で談話は次のように説明されている。

「談話ハ有益ニシテ興味アル事実及寓話通常ノ天然物人  
工物等ニ就キテ之ヲナシ徳性ヲ涵養シ観察注意ノ力ヲ養  
ヒ兼テ發音ヲ正シクシ言語ヲ練習セシム」ここで談話の  
材料としてあげられているもののうち、「有益にして興  
味ある事實及寓話」は、東京女子高等師範学校附屬幼稚  
園が創設の翌年に出した三つの保育科目（物品科、美麗  
科、知識科）の二五の子目のうち一つ「談話」の流れを  
汲み、「天然物人工物」は同子目の「博物理解」の流れ  
を汲むものと考えられる。兩者共に恩物に挿まれた目立  
たない位置に置かれているが（遊戯、唱歌もしかりであ  
るが）、それが、この時期の特色と言えるだろう。

明治一四年六月の保育科目改正で「談話」は「修身ノ  
話」に、「博物理解」は「庶物ノ話」に改められ、兩者

はそれまでとは打って変わって保育科目の前面に置かれ  
るようになる（その後「修身ノ話」は「修身課」と呼ば  
れるようになり、「修身話」と「躾方」に分けられる）。

しかし「修身ノ話」というのは、この保育科目の修正  
によって初めて登場したものではない。明治十年の保育

時間表の中にすでにその名称は現われている。<sup>(1)</sup>それによ

ると第二ノ組（四歳児）に、「博物修身等ノ話及図画」  
「歴史上ノ話」とある。保育子目としては「談話」「博物  
理解」としか挙げられなかつたものが、保育時間表の中  
では（従つてより実際に近かつたと考えられるのである  
が）、「博物修身等ノ話」「歴史上ノ話」などの展開をみ  
せてゐるのである。外国に範をとつて始めた幼稚園  
創設の翌年には、すでに保育の一角に「修身」が位置を  
占めている。教材や設備などの「物」の日本化よりずつ  
と早く、精神の日本化が日常の中で自然に行われていた  
と言えるのだろう。また、数年遅れてそれが文字化され  
たことは、保育の実際が文字に先行していたことを示す  
ものもある。このことは、當時も今も変わらない保育  
の一面を物語るものとして興味深い。

### 談話の時代

もう一つ興味深いのは、「博物修身等ノ話及図画」と  
いう記述である。これは、当時すでに談話と手技とが結

び合わされて行なわれてきたことを示すものである。初期の幼稚園においても、保育子目はそれぞれ独立して行われていたのではなく、幾つかが組み合わされて用いられていたことがうかがえる。「談話」はそれらを有機的に統合するものとして機能していた。そしてこの傾向は時と共にますます強固になっていったようと思われる。

例えば日本保育学会「日本幼児保育史」には、「婦人と子ども」創刊の頃に書かれた京都柳池幼稚園の保育案が紹介、分析されている。それによれば、「四つの保育課目が説話（柳池幼稚園では談話を説話と呼んでいた）を中心として巧みに関連づけられ、幼児の興味をひくように、また印象を強め理解を増すように編成されていた」。<sup>(2)</sup>

例えれば説話で牛若丸の話をするとき、庶物語では戦・雪・剣術・頭巾などの説明をし、手技では、画一カサ、摺一カブト、貼一カサ、板一橋、画一月夜、豆一扇子、積一宮……などをしている。このように「説話」は保育を統合するものとしての役割をもたさせていた。従つて「説話」はたんに子どものよろこび『おはなし』の時間では

なく、これを中心として修身や教訓がされ、一般的知識の教授があり、さらに手技の題材がこの中から選ばれたのであった。したがつて当時の保育のあり方や思想などは説話の姿の中にもっとよく語られている<sup>(3)</sup>と考えることができるのである。

この時代は、恩物が目的とされた「はじめの時代」のようでもなく、遊びが独立した価値と意味を持つものと考えられた「後の時代」のようでもなかつた。むしろ恩物や遊戯が、「談話」という形をとつた「時代精神」とも言うべきものに従属していた時代であった。まさに「談話」の時代である。「婦人と子ども」が創刊されたのは、こうした時代のただ中であった。

では、「談話」では実際にどんな話がなされたのであろうか。初期の幼稚園で（おそらく今日に至るまで）、イソップの寓話が好んで用いられてきたことは明らかである。特に明治六年に出版された渡部温訳「伊蘇普物語」は、絵入りでわかりやすく、幼稚園でもよく用

いられたという。明治九年出版されたドゥアイ著『閔信三記「幼稚園記」』にも「説話」が一八編紹介されている。

それらは「渴鳥遂ニ水ヲ得ル」「傲蛙自ラ其腹ヲ縊裂ス」

などのイソップの寓話が主で、他に「善童果然其實ヲ告グ」（ワシントンと桜の木の話）など、歴史上の人物の話も含まれている。<sup>(4)</sup>また、当時の保母豊田美雄の手記「恩物大意」の「幼稚園ノ子女ニ為ス小説ノ事」にも、イソップの寓話が挙げられている。同書には寓話の最後に「目的」が記されており、それらの寓話がどのように用いられたかを示していく興味深い。たとえば、「猫ト針ノ話」……即慈悲ヲ以テスルトキハ獸類タリトモ其恩ヲ知リテ之ニ報ニ況ニヤ人ニ於テラヤ、「太陽ト風ノ話」……是其身ノ及ハサルコト思フトモ必為スコト能ハス其分限ヲ守ルコト堅固ナルヘシ、などである。

時代が少し下ると、これら「報恩」や「分限を守る」ことが強調されたイソップの寓話に加えて、日本古来の昔話が積極的に幼稚園に取り入れられるようになってきた。お茶の水女子大学附属図書館倉橋文庫には、明治三

十年前後のものと思われる手書きの「昔話」が残され<sup>(5)</sup>、桃太郎、金太郎、舌切雀など六編が収められている。

このような「日本化」を予告するものとして、明治一

四年の保育科目の改正時の「保育用図書器具表」<sup>(6)</sup>に「幼

稚園記」の名がみられないことがあげられる。閔信三記

「幼稚園記」は、もっぱら恩物の解説に終始した桑田親吾訳「幼稚園」（文部省編）とは対照的に、ほとんどが

遊戯、唱歌、談話の材料の紹介であるのが大きな特色の一つであった。両者は共に初期の幼稚園で参考書として用いられていたが、後者がロンジ夫妻の原本にある「フレデリック・フレーベルについての若干の考察」と題する四頁を削除するなど、この書物の基盤がフレーベルにあることが巧みに伏せられている<sup>(7)</sup>。前者は、

「謹テフレーベル氏ノ創設セシ初步教育ノ法制ヲ公立学校ニ誘導スル小冊子ナル……」という文から巻を起こし、フレーベルの名を明記しているという違いがある。さら

に前者には附録として、原本にはないエリザベス・ピー

ボディーと妹のマアリー・マンの Moral Culture of Infancy and Kindergarten Guide, 1860 の翻訳が付され

いたのである。

「人の教育」に深く動かされ、ハーバードに心醉して、まことに Promoting the Kindergarten<sup>(3)</sup> の使徒となつたビ

ーボディーの主著を、「是レ諸師諸母ノ為ニ企設シ頗ル貴重スヘキノ書ナリ故ニ吾輩之ヲ黙過スルヲ得ス……」として別冊附録とし、もつて「幼稚園記」を完成させていることは、「幼稚園」とは極めて対照的な立場を持していることを示すものと言えよう。

そのような特色を持つていた「幼稚園記」の名が消えたのと対応するように、「修身の話の部」で東京女子師範学校「幼稚園修身の話」が、「遮物の話の部」で「日本遮物示教」「幼稚園動物図」「幼稚園動物図解」が参考書として新たに登場している。以後もイソップはよく用いられたのではあるが、談話の扱い方自体がいわば我が國流に変化していくことの現れとみることができよう。それに平行して一方では庶物の話が体系化されてい

#### 東基吉と談話

さて東基吉は明治三七年に著した「幼稚園保育法」の中で、「談話」を次の四種に区別している。寓言、童話、神話及英雄談、事実談話及寓発事項の四つである。」のような東の分類は、これまでの「談話」の系譜からみて、新たなものを提起していると考えられる。まず目につくのは、理科博物的な庶物の話の比重が著しく低いことである。「庶物に関する知識を啓発せんが為めに特に理科博物上の題目を選んで之を授くるを要せず便宜寓言童話等によりて人事に関する感情を涵養すると同時に其目的を達することを得べし。何となればかかる談話に於ては人類共同生活の状態並に其相互の関係等が極めて明瞭簡単に発現せるを以てなり」

もう一つの特徴は、東が「時には全く非教育的の材料をも含む」童話に力を入れたことである。「古来教育者の間独り童話の問題に関して功果を全く非認するのみな

「はず反つて教育上有害の方便として之を排斥する者あり

然れども是れ唯だ童話の材料の不良なるに依るのみ。或は云う寓言童話は多く假作的材料なるを以て之を幼児に聞かしむるはまさに虚偽を授くるに等しと。然れども元來所謂虚構と称する中には自ら二様の種類あり即ち一は全く悪意より出るものにして一は想像より出るものなり」<sup>(1)</sup> 東はアドラー (Adler: Moral instruction of the children) の論を引いて、童話の教育的価値を、「幼児の想像力を豊富ならしむること」、「幼児に理想を構成せしむること」としてゐる。この点を強調したことは、それまでの経緯から考えて、當時として革新的なことであつた。想像力を豊富ならしめ、それによって幼児の理想を構成せしめ、もつて教育上の効果をあらしめんとする所論から、東は前章で取り上げたように子ども欄を充実させたのである。『婦人と子ども』に掲載された「童話」が、教訓的、修身的なものがありながらも、一方では時にナンセンス、時に天衣無縫であるのは、こうした考えに裏づけされているからであると言えよう。また同様の

考え方から、「理科博物上の題目」を主とするいわゆる庶物の話には、子どものための子ども欄ではなく、学術欄

という「大人」向きの名を与えたのではないだろうか。

子ども欄の重視と学術欄の設置とは、時代精神に包まれた談話の中に座しながらも、子どもへのまなざしと、子どもたちのための労を惜しまなかつた東の面目を示すものと言えよう。

### 第三章 史伝欄

当時の『婦人と子ども』が婦人教育に力を入れていたことは、当の雑誌名からも、創刊の辞からもはつきりと知らされることである。誌面からみても、料理、裁縫、育児、看護、家庭運営等の方法を教える家庭欄、婦人の教養を高めるための講義欄・説林欄など豊富である。なかでも史伝欄は婦人たちに、それらすべての基盤にあるべき道徳的指針を示すものとして重要な位置を与えられていた。史伝はいわば婦人に与えられた「談話」であつ

た。倒幕維新の動乱期に勤王の志を固くし、節を曲げずに生きた女性たち（「野村望東尼」「津崎矩子」等）、賢母良妻の範として女性たち（「吉田松陰の母滝子」「藤田東湖の妻里子」等）、徳孝の高い無名の子女の伝など、当時の社会が婦人に求めていたものがストレートに反映されている。同時に、それらは、天皇をいただいて近代国家への道を急速に歩みつつある「明治」という時代を称える圧倒的な贊歌でもあった。

明治三二年二月、高等女学校に関する最初の独立の勅令として高等女学校令が公布され、それによって、各府

県に高等女学校が設置されるようになつたが、就学率はきわめて低く、一般的の関心も低かった。例え関心を持たれていたとしても、その大勢は「良妻賢母への教育」であつたことは疑いない。創刊号の説林欄に掲げられたフレーベル会々長（女子高等師範学校長）高嶺秀夫の「婦人と子どもも発刊に就て」にも、「抑も最大多数の婦人の天職の帰着する所は賢母となりて其子を充分に育成するにあるなり。故に婦人が、年少の時より、學習する所の

ものは、すべて、此天職を尽さんがために必要な準備とならざるべからず」とある。東自身も、女学校教育を肯定しながらも、「女性性」を發展させることがその眼目であるとしている。<sup>(12)</sup> 女子教育に対するこの考え方は、彼の時代の『婦人と子ども』に一貫して流れる重要な基調である。

### III 節 東基吉時代の『婦人と子ども』とは何か

#### 第一章 誌面の変遷

創刊当时十・十二もの欄をもつていた『婦人と子ども』は間もなく整理されていく。早くも一巻六号からは、東自身が「幼児保育法につきて」を発表した研究欄がなくなる。もちろん、それに類した記事がなくなったのではなく、以後は説林欄に移されるのであるが、発刊の冒頭に「我国教育界刻下の急務は児童教育法の研究なり」と諷られた「研究」の文字が消えた意味は大きいと言えよう（しかし実は、発刊の辞は一般に考えられてい

るほど「研究」という言葉に比重を置いてはいない。むしろ以後同誌が「研究」からますます後退し、家庭教育、女子教育に本領を發揮することを予告するものとして読むことができる。

研究欄にかわって寄書欄が登場する。この欄は各地のわらべ歌・遊び等の紹介や、読者からの質問、日常生活に拾った話題など幅広く用いられている。

四巻から各欄の構成が一新され、子ども欄以外はすべて、新設の「婦人と子ども」欄に吸収された。この欄は多彩であり、内容はこれまでの傾向を踏襲しているように思われるが、その性格は名称の変化に対応して確実に変化している。それを裏書きするかのように「婦人と子ども」欄が登場した四巻一号には「編集局より」として次のように述べられている。「……まこと、歳月は流るゝが如く、何かと申す中に、本誌も、こゝに満三歳の齡を重ね候……就きては……多少の體裁を改め候……金玉の文字、錦鏽に加ふるに花を以てすべく、真に我國、家庭教育、女子教育の伴侣たることを期すべくと存じ候」

(傍点筆者)こゝではつきりと、同誌の使命は家庭教育・女子教育にありと謳われたわけである。それに対応して、「婚姻の性質」「婚姻の要件」などが連載される。またこの時から先に挙げた東くめの「貞一の日記」の連載が始まっている。

五巻一号では「第五歳を迎ぶ」(牧羊)と題して、発刊五年目を迎えた感謝と、国家発展のためになお一層の努力をなさんとの決意が述べられる。

六巻四号には「本誌革新の辭」が掲載され、家庭教育、女子教育の他に幼児保育の名が復活する。同時に、「婦人と子ども」という欄の名前が取り扱われている。

七巻から誌面は再び結婚、料理等、これまでにも増して家庭向き、婦人向きとなる。そして七巻四号には巻頭に「本誌の本領」と題して、「いよいよ(国家のため)家庭教育に力をつくさんか……」と述べている。

そして七巻の終り頃から東の名が誌面に現われなくななる。この年の夏期講習会開催広告の講師の欄からも東の名が消える。

八巻十号にはじめて、編集和田実と明記される。おそらく実質的にはもと前から和田に編集のバトンが渡されていただろう。「編集者」として名前が誌面に公表されるのは、この時の和田が最初である。そして九巻一号には、「新年を迎ふ」幹事一同、として、「本誌が幼児教育界に貢献せる處決して勘少にあらず……」(傍点筆者)と掲げられる。ここには家庭教育等の言葉は全くみられない。そしてこの時から「幼児教育研究雑誌」という言葉が「婦人と子ども」誌に冠せられるのである。『婦人と子ども』新時代の幕開けである。

この時、「婦人と子ども」は面白を一新したといえるだけだ。

（傍点筆者）

ある。この場合も東基吉から和田実へという過程で、『婦人と子ども』は断続的な変化をとげた。ヴェールのかなたから編集者が姿を現わすと共に、「幼児教育研究雑誌」という自らの立場を新たに打ち出したのである。

この時、『婦人と子ども』は面白を一新したといえるだろう。

こうして一雑誌の歩みの跡をたどつてみると、あたかも人の一生を見る思いがする。人間の成長が、その一つ一つの成長段階において、それぞれ固有の関心、テーマを持つてゐるようだ。雑誌の成長にもそれぞれの時代の固有の関心・テーマがある。一人の人間の成長の過程が、つぎ目なく連続する一つの流れでありながら、時を得て全く新しいものが生み出されてくる断続した成長の連鎖でもあるように、しかもなお、それが個人としても社会としても歴史としても連続した流れであるように、雑誌の成長の過程もまた同様である。今、絶えざる流れとして一挙に私どもの前に姿を現わした『婦人と子ども』は、相対的な時間の流れの中で、「東基吉の時代」

を自身の薄明の幼児期として位置づけている。

員　男　　在京　一〇〇  
　　地方　　三　　女　〇  
　　海外　　一

## 第二章 東基吉時代の

### 『婦人と子ども』の位置

本稿ではこれまで東基吉時代の『婦人と子ども』そのものに焦点を当てるにによって、『幼児の教育』における創刊の時代を明かにしようとした。最後に本章では『婦人と子ども』の外に目を向けて、全体の中での同誌の位置について考えてみたい。

創刊当時、『婦人と子ども』の発行部数は三百部。<sup>(13)</sup>うち、会員に配布されるのはおよそ半数であった。<sup>(14)</sup>「フレーベル会第四年報告」によれば、明治三三年三月現在の会員総数一三八、客員総数二四、内わけは次の通りである。

員	男	在京	九
	地方	地方	一四
会員	女	在京	一一四
	海外	海外	一四
員	男	在京	一一四
	地方	地方	一四
会員	女	在京	一一四
	海外	海外	一

一方、当時は関西の保育会の動きが大変に活発で、実質的に東京を凌ぐものであつたことが多くの研究者によつて指摘されている。東自身も、「一体、大阪という所は、教育、殊に幼児保育については頗る熱心で、此點に

圧倒的に女性会員が多い。会員名籍によると、そのうち十名前後が公立小学校に所属している他はほとんど、官公私立の三七の幼稚園に所属している。文部省年報によれば、明治三三年の東京市全体の保姆数は一〇八、幼稚園数は三八であるから、『婦人と子ども』は東京市のほぼ全幼稚園、全保姆に行きわたっていたと言うことがで

きる。その点からも、同誌の役割は大きかつたと言えある。ただし、当時はそれが、東京という一地域に限られていたというのが実状であった。同誌が全国的な規模で読まれるには、まだ時を待たなければならなかつたのである。

つきては東京の冷淡なるとは丸で正反対である。」と度々歎息している。<sup>(15)</sup> さらにキリスト教系幼稚園の動きも見逃せない状況にあつた。例えば正統的なフレーベル主義は、ハウ (A.L. Howe) の働きを待ってはじめて日本に紹介されたといえるし、活発な京阪神三市連合保育会の基礎づくりをしたのもハウの働きによるところが大きかつたといえる。この時にはまだ日本のキリスト教幼稚園は組織化されていなかつたが、保育者養成の面からみても、その動向は見逃し得なかつたと思われる。しかし、これら的情勢が『婦人と子ども』に充分に反映されていたとは言えない。というより、同誌は本来、そうした全体を写す鏡として意図されてはいなかつたと言つた方が正確であろう。この時代の同誌は、一地域の、ある限られた範囲で活動していたと言えるであろう。

最後にアメリカの新教育運動との関係について一言ふれてみよう。『婦人と子ども』が創刊された時代が、アメリカで新教育運動が起こり、また力を得つあつた時代とちょうど対応するところから、同誌を我国の新教育

研究の必要を謳つてゐる「発刊の辞」からも考えられることであるし、本文に掲載された論説の中にもそれを示すものが幾つかある。例えば「幼稚園保母に望む」(一卷九号、無署名であるが、東基吉の手になるものと考えられる)、「幼児保育法につきて」(一卷一・二号 東基吉)、「現今幼稚園保育法につきて」(二卷九号 同)などである。

しかし、それらを、本稿でこれまで述べてきたような、いわば「地の文」ともいえるものの上に置いてみたらどうだろう。それだけを取り出してみるとは違う別の紋様をもつて我々の目に写るのではないだろうか。恩物等の批判の後に、「要するに、保育は子供の自然に從ふべきである、然るに今日は子供に望むに大人の考を以てする事が多い、談をするにしても、遊戯をするにしても、はた、又恩物を弄ばせるにしても、頗大人の心を以て解釋して居る事が多いですから、今少し自由に、子供には子供らしくやってはどうかと云う事に帰するので

ざいます」（「幼児保育法につきて」）という文を読む時、それを進歩主義の論説として「地の文」からとびぬけて異なつたものとして位置づけるよりも、むしろ「地の文」と底流を同じくするものとして位置づける方が、より「自然」であるように思われる。アメリカの新教育の動向が『婦人と子ども』創刊の一つのバネとなつたのは事実かもしれない。けれども雑誌を実際に動かしていたものはいわゆる新教育思想ではなかつた。

私は東基吉時代の『婦人と子ども』を『幼児の教育』誌の幼児期であると位置づけた。けれどもそれは、成長した後の時代より劣つてゐるという意味ではない。それぞれの時代がそれぞれの課題をもつてゐるのである。東基吉は、精力的な努力と熱意とによって、いまだ未分化とも言えるこの時代の課題を十分に果たしたということができる。本稿は、なぜ東基吉の名が編集者として誌面にあらわれなかつたのかという小さな疑問から出発した。ヴェールのかなたに見えかくれする編集者の姿は、

「自然」であります」（「幼児保育法につきて」）という文を読む時、それを進歩主義の論説として「地の文」からとびぬけて異なつたものとして位置づけるよりも、むしろ「地の文」と底流を同じくするものとして位置づける方が、より「自然」であるように思われる。アメリカの新教育の動向が『婦人と子ども』創刊の一つのバネとなつたのは事実かもしれない。けれども雑誌を実際に動かしていたものはいわゆる新教育思想ではなかつた。

実はこの未分化な時代の象徴だったのかもしれない。ヴェールを剥ぎ取つて編集者の名が表現された時、初めて「幼児教育研究雑誌」という分化が行われたのである。未分化であつたことそのものが、この時代の大きな特色であった。

幼稚園がまだ一般に認められていなかつた時代に、東基吉は開拓者として勞し、『婦人と子ども』を次代へとつなげていつた。出発の時に、このような働き人を得たのは同誌にとって幸いなことであつたと言わねばならぬ。彼の働きぶりと、その消え去り方を見る時、東自身が死の前年に自らを評して語つた言葉、「私は日本の幼稚園の殉教者そのものの気持ちで尽してきました」<sup>(16)</sup>が、まさにふさわしく思われる。

### おわりに

私は本稿を書きながら、「資料」を「読む」とはどういうことをかを絶えず問い合わせてきた。私どもは様々な「資料」から、過去のもの、現在のもの、あるいは未来のも

のやうやく「読む」やうとする。そして、それをどう「読む」かによつて、読まれるものの意味は違つてくるのである。読むものと読まれるものとの関係によつて現れるものは違う。

私は本稿で、東基吉時代の『婦人と子ども』を明らかにしようとしてきたが、それは、私自身がこの時代の『婦人と子ども』をどう読みだかを示す軌跡でもある。

そして私は、私なりに、私の読み方を提示できたと思う。本稿を、『婦人と子ども』の意味づけであると同時に、私自身の道程の一歩としても位置づけたい。(了)

校がこの名称の下にあつたのは明治23・3～明治41・4の間である。

倉橋・新庄「日本幼稚園史」には明治十年の保育科目と並記されているが、表中の保育項目の名称等から、この表は明治十四年の保育科目改正後のものと考えられる。

岡田正章「『幼稚園記』解説」による(「明治保育文献集別

卷」所収 日本らしいばかり)

筆者自身が原本と照合したところでもそれは明らかである。またそれ以外にも書物の背景を伏せている箇所がある。

Dauntless Women In Childhood Education 1856-1931; ACEI, 1972 p. 31

閻恒川訳「幼稚園記」3頁

この文はあとあと前出の原本にある Douai の言葉であるが、原本の “We do not mean to supersede ~” を ‘‘黙過スルヲ得ス’’ と訳したりといふ。閻はこの文を自身の意志の表明として用いたのである。

東基吉「幼稚園保育法」92頁 復刻版

東基吉 前掲書 83頁

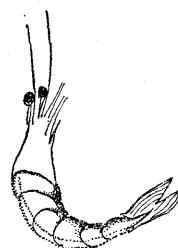
霧生(東の筆名)「女子の特性を發展せしむべし」『婦人と子ども』一巻五号

東基吉「婦人と子ども創刊当時の子どもと其頃の幼稚園の状況に就きて」『幼児の教育』50卷11号  
明治四年度のものがないので、以下数字はすべて三三年度のものを用いた。  
1872には、Talesとして1-11編取められていて。残り六編は闇の考へにより加えられたものと思われる。ワシントンの話は、後者に含まれる。

年号の記載はないが、用いられた原稿用紙の銘が「女子高等師範学校」とあることから、この時代を同定できる。同昭和出版

- (5) (1) 註  
日本保育学会「日本幼稚園史」第一巻 95～96頁 及び  
「東京女高師年報」  
同第一巻180頁 「定着期の幼稚園の保育課程」  
前掲書 203頁
- (4) (2) (3)  
「幼稚園記」の原本 The Kindergarten. by Dr. Adolf Douai, 1872には、Talesとして1-11編取められていて。残り六編は闇の考へにより加えられたものと思われる。ワシントンの話は、後者に含まれる。
- (5) 年号の記載はないが、用いられた原稿用紙の銘が「女子高等師範学校」とあることから、この時代を同定できる。同昭和出版

# 雑感——一九八二年の年末に



津守眞

今年は、梅雨から引きついで夏になつて、炎暑にならず、異常な夏だと云つてゐる間に、雨から台風へと続く秋になつてしまつた。まだこれからどんな天候になるのか、例年の予想どおりにはいきそうにない。でもこれは日本中の人がいま同じ境遇の中にあるのだし、世界情勢の異常と不安も、一九八二年を生きた世界中の人々が、それぞれの見方は違うにしても、共通に体験してきたことである。

今年の夏、私は、大分県で学法の幼稚園の大会の機会に、国東半島を訪ねるこ

とができた。日本の古代文化が、奈良と競つて九州の北端の半島で栄えたことは不思議に思つていたが、ほんのわずかではあつたが自分の足でこの地を見たのは幸いだつた。あちこちで、石や崖に刻んだいわゆる磨崖仏に出会い、その表情が、奈良や京都の仏像の深遠な、ときによると観念的な静かさとは違つて、人間的な活力を感じさせられた。荒削りの目と鼻の大きな仏がまたがつてゐる動物は、牛とも猫ともいえるひょうきんな顔だつたし、不動明王の鼻の穴はとくに大きくなつた。私は、韓国とか日本とかいうまとまつた國家觀念が現代のように際立つたものでは

た頬と口には笑つてゐるようなユーモアがあつた。私は耶馬台國論争に格別の興味をもつていたわけではないけれども、ここにくると、松本清張が「陸行水行」という短編で云うように、魏志倭人伝の「水行十日陸行一月」という旅程で古代の韓国から来ることができたのはこのあたりだったのではないかという推理的興味をもたされてしまう。活気のある大らかさを示すこの石仏たちは、大陸文化の直接の息吹を感じさせる。古代には、韓国とか日本とかいうまとまつた国

なくて、近隣の島にゆく心安さがあつて往来したのではないかと私は考えさせられた。そして、きっと大らかに人間として近隣の人たちと交際したいとあらためて思った。

この夏、私は南と縁があつた。沖縄タイムス主催の保育セミナーに招かれ、沖縄の保育園の先生方の熱気に入ることができた。沖縄は、私は、丁度二十七年前に認定講習の講師として四十日間滞在したことがあったので、たのしみにして出かけた。当時の沖縄は、まだ敗戦と占領の傷の只中にあつた。暑も夜も地の下から背中が熱せられるような暑さに耐えられず、一時間もかかつてバスに乗って那覇で唯一冷房のあるレストランに冷を求めた時代であった。今回、冷房完備の那覇のホテルに泊り、観光店が街路の両側に立並ぶ国際通りを、快活な若者の群にまじって歩き、頻繁な台風にも微動だにしない民家の変貌を見て、悲惨からの

復興に安堵すると共に、時代の変化を感じさせられた。以前に私が滞在していたのは、與那原と糸満で、本島南部の激戦地だった。私は何週間も泊めて頂いた家など訪ねたいと思い、セミナーの翌日、那覇からバスで約一時間海沿いに南の方に下つて糸満に行つた。むかしの石垣はブロック垣にかわり、瓦の平屋根の家々は鉄筋コンクリート建築となり、お世話になった家は遂に見付けることができた。沖縄小学校は、建物は立派になつて昔の面影をとどめていた。校長先生は御不在で、私は帰宅したところにもよる。昼食を共にしながら、話題がそのことになつたとき、一人の先生が親泊千代さんの教え子であることを語られ、私はその生涯を偲んだ。三人の女の先生方とは、互いに名も知らないまま別れたが、忘れられないひと時であった。

そのあと、私はひとり白梅之塔を徒歩で訪れた。二十七年前に沖縄にきたとき、女高師の同窓会である桜蔭会の方々が十人程集まつて下さり、こもごも戦争の体験を語られて後、沖縄第一高女の校長としてひめゆりの隊長であり、当時琉球大学の学長をしておられた仲宗根政善氏著「沖縄の悲劇」を私に十冊託され

遠くない所だったので、大地に穴をあけただけのあの壕に何度も足を運んだことがあった。女高師を卒業直後に沖縄第一高女に赴任し、ひめゆりの塔で最後を遂げられた親泊千代さんは、私の妻の姉と

女高師の同窓で、大塚の学内寮で隣室同士だったという気持の上の親近感があつたことにもよる。昼食を共にしながら、話題がそのことになつたとき、一人の先生が親泊千代さんの教え子であることを語られ、私はその生涯を偲んだ。三人の女の先生方とは、互いに名も知らないまま別れたが、忘れられないひと時であった。

た。私は後にそれをお茶大と附属校園に配つて歩いたが、米軍の艦砲射撃に自分たちも傷つきながら、負傷した日本兵の看護をしつつ、南へ南へと逃避行をしてゆく女学生たちの姿が刻明に描かれている。その中には軍人たちが、共に逃げてゆく住民、女、子どもを壕から追出し、泣く赤子の口をふさぐ場面なども記されている。「かなしさのあまり井戸までかけたけれど水くみし子の足跡もなく」「めしひなるつわものつれて乙女」のねばたま夜を麻文仁へ去りぬ仲宗根政善私はかつてその足跡を辿りつつ、那覇から南風原、東風平、真壁、伊原、摩比仁へと歩いたことがあって、途上、沖縄第二高女の若い人たちの自決の壕に立てられた白梅之塔を見付けたので、今回もそこに立ち寄りたいと思ったのである。そのとき、初老の夫婦が御馳走を持ってきて塔にささげては食べており、私は胸つまる思いで、ここで最後をとげられた娘さんの話をきいた。いま、糸満か

ら白梅之塔へゆく山路は、地図には載っているけれども、荒れていて通行できなない。致し方なく、遠回りしてバス通りを歩かねばならなかつた。白梅之塔の記念碑はいまは観光客の目にもめったに触れないのであらから、せめて碑文だけここに記しておきたい。

「県立第二高等女学校、三、四年生は、昭和二十二年三月より、第二十四師団野戰病院に於て看護実習訓練を受け、三月二十四日看護婦として東風平村富盛の八重瀬岳にある同師団第一野戰病院に入隊、戦傷者の看護に当つていたが、六月上旬同地を出発し多くの犠牲者を出したながらも傷ついた患者を助け此の地に移動し看護に専念していた処 六月二十日攻撃を受けてここで最後を遂げた」

簡単だけれども痛切な記述である。そのわきに白梅字徒看護隊自決之塚が、いざなふしく口をあけている。

丁度、今度も台風が近づいていて、翌日保育園の現場を見せて頂く約束をして

いたのに、予定を変えて早朝の飛行機の便で帰ってきたのはあとになると残念な思いである。

沖縄に発つ前後から、教科書問題が大きくなるに報道されつづけた。こんな自分がいだらうから、せめて碑文だけここに明なことは、まず、人間として率直に非を認めないと、何もかもがはじまらない。中韓国と沖縄とを区別して事實を扱うなど、あまりに日本のすぎる。

八月某日の朝日新聞の「折々のうた」には前川美佐雄の次の歌が紹介された。「かかる日にたしなみを言ふは愚に似れどひと無類にて憤ろしも」という歌であつて、大岡信の解説に、「戦争末期、米軍機の空襲が激化してきたため家族を島取県の山奥へ疎開させた時の山陰戦事中の感概を歌う。……こういう歌を読むと、昨今のことを歌つたようにも思える」と述べられている。この夏、新聞紙上で、また路上で、私の胸につまっていたもの

をことばにしてくれたような気がして読んだ。

夏の終りに、例年私が出席する会合が

二つある。一つはみどり会の講習会であ

り、もう一つは御殿場コロニーセミナー

である。前者はお茶大の幼稚園教育臨時

養成課程の卒業生が中心になった会合で

幼稚教育の人達にはよく知られているの

でここでは触れない。後者は、精薄児、

精薄者の施設、学校の人たちを主とする

セミナーで、約四十人で三泊四日のセミ

ナーである。牛島義友先生がはじめら

れ、本年で二十回になる。毎年、私は朝

六時半からのメディテーションを担当し

ている。今年は私は考えるところがあつ

て、創世紀十二章の「時に主はアブラム

に言われた、『あなたは国を出て、親族

に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地

に行きなさい。』……アブラムは主が云わ

れたようないで立った。』という箇所をテ

キストにして語った。人生の新しい出発

とは、人間の精神史の最も古いテーマの

ひとつである。

このセミナーでもうひとつ例年私が感

じることは、集まる人がどこから来て何

をしているかということはじきに問題

でなくなり、三泊四日の後には共通の生

活に参加したという思いだけが残ること

である。精薄の仕事と幼稚園保育園の仕

事についても同様のことが云える。人間

を相手にする仕事として、両者は、考え

方においても、指導の方法においても共

通のことが多い。もちろん、相手がかわ

れば具体的なことは全く違ってくること

もあるが、それでも、普通に考えられて

いる以上に共通点が多いのだと私は思

う。どちらも、それぞれ相手から学ぶこ

とが多いことを私は長年経験してきた。

これから時代によくそうだと私は思

う。

「幼児の教育」誌についていえば、本年

はとくにお茶大の関係者による記事が多

かったかと思う。この雑誌が本学の前身

である女高師で創刊され、長年本学で編

集されてきたことを思えば当然のこと

もあるが、だからと云つて、決して一つ

の大学の党派的立場によるものではない

い。時代の流行に左右されないで、幼児

教育の本質を考えつづけることが、この

雑誌の使命であると私は思つてきました、

今後もそうであるように願つてゐる。明

日の幼稚園の現場に役に立たないといふ

批判をたえず受けたけれども、昨日

も今日も明日も、幼児教育の根底に流れ

るものを考えつづけることがこの雑誌の

使命と思つてゐる。現実には不十分なこ

とが多いけれども、この雑誌が、一大学

のためでなく、幼児教育の本質を守るために

めのものとして、執筆者にも読者にも御

協力をお願ひする次第である。

# 好評発売中

幼児を  
のばす 指導のポイントシリーズ(全10巻)

微妙で大切な保育のカンどころを、がつちりと読みとろう！

子どもたちに豊かな保育をと心をくだいてあられる先生や、子どもがよくわからない、きっかけがつかめないと悩んであられる先生へ、本シリーズは生きた指導の実例を提供します。保育の原点に立ちかえり、保育の考え方、子どもの見方、指導の方法などを点検して、子どもの心を読みとり新しい遊びへと展開してください。

- ①保育の視点 -ここがポイント 海 卓子・著
- ②指導計画 -ここがポイント 高杉自子・著
- ③絵画の指導 -ここがポイント 林 健造・著
- ④音楽の指導 -ここがポイント 早川史郎・著
- ⑤体育の指導 -ここがポイント 三宅邦夫・著
- ⑥自然の指導 -ここがポイント 小山孝子・著
- ⑦ことばの指導 -ここがポイント 阿部明子・著
- ⑧ごっこ遊び -ここがポイント 笠間典美・著
- ⑨園行事 -ここがポイント 仲田あつ子・著
- ⑩母親対応 -ここがポイント 本吉圓子・著

B6判・セットケース入り・平均208頁・セット定価9,600円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

# 子どもの遊び

(全6巻)

## ○歳から二歳(3巻セット)

土屋多喜栄 丸尾ひさ

本吉圓子 田中文子 著

絵・浜田洋子 川上尚子 各野いちこ

## 三歳から六歳(3巻セット)

本吉圓子 前典子 笠間典美

田中文子 矢作邦子 著

絵・ふじたひでのみ 上條達子 むかいながまさ

いすれもセットケース入  
セット定価 各3,300円

この本に収録した遊びは、0歳からの歳までの子どもの成長過程において、だれでもが大好きで、必ずといってよいほど通過する遊びです。また、これだけはぜひ経験させたい遊びを現場の体験を生かした保育者の目でもとめたものです。

遊びの中で何が育つているか、保育者はどんな工夫をすればよいか、どうしたらその遊びがさらに楽しくなるかななどについて考え直すヒントがたくさんもり込まれています。



イラスト 浜田洋子

ワ・ワンくん こににちは



0歳からの歳までの発達に応じた基本的な遊びをきてきなイラスト入りで紹介。